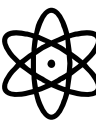


*MESA BOOGIE*<sup>®</sup>

*Electra*  *dyme*<sup>™</sup>

**取扱説明書**

## Hello from the Tone Farm

この度はELECTRA DYNE(エレクトラ・ダイン)をお買い求めいただき誠にありがとうございます。そしてメサ・ファミリーへようこそ! ELECTRA DYNE(エレクトラ・ダイン)は、新たなパフォーマンス・ステージへと、あなたを誘います。このアンプは、シングル・チャンネル・フォーマットで、シンプルなコントローラーのレイアウトであるにも関わらず、内部で回路を切り替える事により、多種多様なサウンド・メイクを実現しています。象徴的なサウンド・コレクションは、ビンテージ・アンプに触発されたデザインのシャーシに収められ、6つのツマミと1つのトグル・スイッチにより、シンプルにコントロールすることができます。また、回路の切り替えはフットスイッチで行う事も出来ます。ですから、シングル・チャンネル・プラットフォームではありますが、3つのモードを切り替える事で、多彩なサウンドのパフォーマンスを可能にします。ELECTRA DYNE(エレクトラ・ダイン)は、米国ペタルマの工場ではンド・メイドで製作されており、プレイヤー自身、あるいはアンプのクラフト・ショップでチューンナップし易い設計になっています。

40年に渡って、我々はミュージシャンに対して様々な事を約束し実行してきました。今、あなたがこのアンプを手に入れているという事が、それに対する答えだと我々は認識しています。そして、この新しいアンプにギターを繋いで音を鳴らしたら、数分のうちにあなたが笑顔になっていることを我々は確信しています。しかし、あなたがこのアンプの真価を知るのは、もっと時間が経ってからの事でしょう。それはもしかすると、このアンプを手に入れるのに支払った額を忘れてしまうほど先の事かもしれません。それほど奥深い価値を持ったアンプなのです。

私達は、あなたのサウンドを実現する為にメサ製品を選んで下さった事に感謝すると同時に、あなたの日々の努力が報われる手助けが出来る事を願っています。このマニュアルは、それを実現するのに役立つ事でしょう。あなたは今、限らない表現力を持つ楽器を手に入れているのです。さあ、遥かなる音楽の旅に出かけましょう。Mesa/Boogieのスタッフ全員があなたを応援します。

## 使用上のご注意

この説明書を読んで下さい。

この説明書をなくさない様に保管して下さい。

注意事項を必ず読んでからお使い下さい。

安全事項にも従って下さい。

水の近くで当製品を使用しないで下さい。

汚れた時は乾いた布で拭いて下さい。

換気口を塞がないで下さい。説明書に従ってインストールして下さい。

暖房機器や、他のアンプなど、熱を発する機器の近くに置かないで下さい。無理やり、形の違うコンセントに挿さないで下さい。有極プラグは片方のブレードが幅広くなっています。アース付プラグは2つのブレードの他にアース端子も付いています。アースは安全の為のもので、自宅のコンセントに差し込めなかった場合、電力会社に相談して下さい。

電源ケーブルを踏んだり、曲げたりしないで下さい。

落雷の恐れがある時や、長時間使用しない時は電源ケーブルを外して下さい。

修理が必要な時は専門家に依頼して下さい。ケーブルがダメージを受けたり、本体が傷ついたり、濡れたり、落として壊れたりした場合、修理に出して下さい。

換気の為に本体の後ろに必ず10センチ程度のスペースを空けて下さい。換気口の上に新聞、テーブルクロスやカーテン、といった物を置かないで下さい。

ロウソクや火が付くような物を本体の近くに置かないで下さい。

濡れている物も本体の近くに置かないようにして下さい。

注意:安全のため、本体を雨や湿気に晒さないで下さい。

なるべくコンセントの近くに設置して下さい。

注意:必ず適切な接続をしてからアンプを操作して下さい。そうしないとアンプが故障する可能性があります。

直射日光や高い湿度は避けるようにして下さい。

必ずアースを接続して下さい。

解体したり、ヒューズやチューブを交換したりする前に必ず電源ケーブルをコンセントから外して下さい。ヒューズを入れ替える時は、必ず同じタイプのヒューズを使って下さい。

動作中にチューブに直接触れないで下さい。

子供に触らせないで下さい。

故障を避けるため、ケーブルなどを接続する前に電源を切って下さい。

汚れを取るのに溶剤を使用しないで下さい。

必ず本体の裏に表示されている条件を満たすAC電源を使用して下さい。輸出モデルは各国の電圧に合わせてあります。お住まいの規定に従って電源に接続して下さい。

大きな音が出ますので、スピーカーに耳を近づけないで下さい。

Mesa/Boogieアンプはブスベック用の機材ですので、規定に従って扱って下さい。

**上記の取り扱い注意事項と安全管理事項を必ず読んで下さい!**

# Electra dyne.

## 目次

使用上のご注意	0
概要	1-2
始まる前に	3-4

### フロントパネル: コントロールと特性

モード: CLEAN, VINTAGE LO, VINTAGE HI	5-7
VOLUME (ボリューム)	8-10
TREBLE (トレブル)	10-12
MID (ミッド)	12-13
BASS (バス)	13-14
PRESENCE (プレゼンス)	14
MASTER (マスター)	14-15
STANDBY (スタンバイ)	15
POWER (電源)	15-16

### バックパネル: コントロール、スイッチと端子

フューズ	17
EFFECTS LOOP (エフェクト・ループ)	17
REVERB (リバーブ)	18
FT.SW. (フットスイッチ)	18
BIAS SELECT (バイアス) スイッチ	18-19
SPEAKERS (スピーカー): 8Ω / 4Ω	19
SLAVE (スレーブ) 出力/レベル	19
CLEAN LEVEL (クリーンレベル)	20
GAIN TRIM (ゲイントリム)	20-21

スピーカー・インピーダンス・マッチングと接続ガイド	22-27
真空管の詳細 (ELECTRA DYNE ヘッド)	28
真空管の詳細 (ELECTRA DYNE コンボ)	29
パーツ・シート (ELECTRA DYNE ヘッド)	30
パーツ・シート (ELECTRA DYNE コンボ)	31

# Electra<sup>®</sup>dyne™

## 取扱説明書

### 概要:

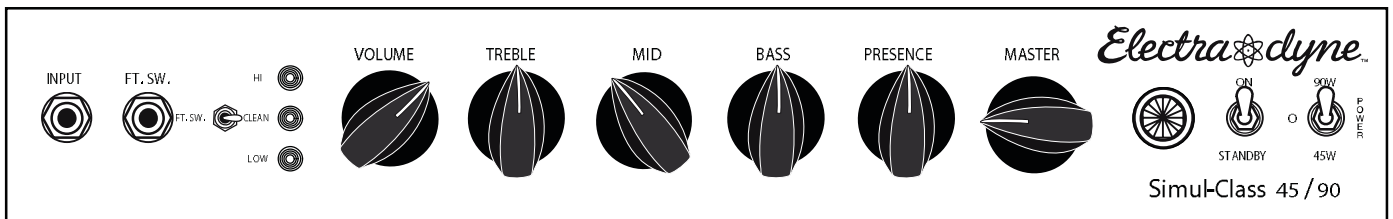
ELECTRA DYNE(エレクトラ・ダイン)は、シンプルで直感的な操作性を持っている事が、一目でお解り頂ける事でしょう。それが我々の狙いであり、デザイン上のゴールともいえるのです。小さなトグル・スイッチでモードを切り替えると、目には見えませんが回路構成が完全に切り替わります。これは、アンプ自体を変えているのと同じことです。また、この回路構成の切り替えは、フットスイッチで行う事も可能です。この時、フロント・パネルのコントローラーは全てのモードで共有します

モードの名称は、伝統的なギター・アンプ回路のうちの3つを象徴しており、実質的にほとんどの音楽ジャンルのサウンドを網羅しています。CLEAN(クリーン)モードは、ロー・ゲインの甘くて弾けるようなコード・サウンドを生み出します。このアンプを設計する際、回路は再検討され吟味を重ねた結果、サイマル・クラスのパワー・セクション特有の官能的な雰囲気強調されたサウンドになっています。さらに、メサが特許を有する技術により、偶数次倍音と超低域が強調された瑞々しいサウンドを生み出しています。

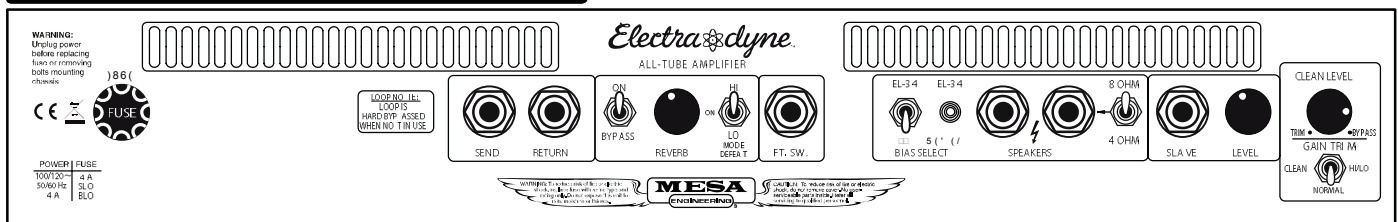
ELECTRA DYNE(エレクトラ・ダイン)は、大西洋を渡ったイギリスの伝統的な回路に敬意を表する事も忘れてはいません。それは、メディアム・ゲインのパンチの効いたサウンドを生み出す、VINTAGE LO(ビンテージ・ロー)です。入力信号は異なる真空管に送られ、新たにエキサイティングな要素が加わったクラシック・ロック・サウンドを生み出します。このVINTAGE LO(ビンテージ・ロー)モードは、驚くべきメディアム・ゲインのクランチ・リズム・サウンドを生み出し、弾き方によっては攻撃的なアタックを失う事無く、心地よく歪んだサウンドになります。そのサウンドは、イギリスの伝統的なサウンドに似ていながら、魅惑的で洗練された、サイマル・クラス特有の落ち着きのある雰囲気を醸し出しています。音質面でも雰囲気の面でも新しい個性を作り出しつつ、イギリスのスタイルを残しています。トレードマークともいえるサウンドは、さらに心地よいものになっています。例えるなら、革に包まれた野球のバット、あるいはベルベットのハンマーで叩いたような音といったところでしょうか。

VINTAGE HI(ビンテージ・ハイ)モードにすると、イギリスのアンプを特注でさらに磨き上げたようなサウンドになります。それは、目一杯圧力の掛かった消火ホースを持っている手に伝わってくる感覚に似ています。内部での動作は真空管のステージが上がり、回路も切り替わってブギーなサウンドを生み出します。サイマル・クラスのレンドリングにより、イギリスのアンプを模倣した至高の真空管サウンドを実現しています。このモードは、豊かな倍音成分を含んだクランチ・コード・サウンド、や、音の輪郭が柔らかく、軽々と空に舞い上がっていきそうな単音ソロ・サウンドを生み出します。サイマル・クラスは、イギリス風のパフォーマンスを保ちながら、サウンドのエッジをスムーズにするという新しい試みにも貢献しています。

### フロントパネル: Electra Dyne 45/90™ Combo



### バックパネル: Electra Dyne 45/90™ Combo



## フロントパネル: コントロールと特性

これら3つの伝統的な回路構成は、フットスイッチで切り替える事が出来ます。入念に作られたサウンドは、この偉大なフットスイッチ・パフォーマンスにより、さらに生きる事になります。モード間のサウンドの微妙なニュアンスに関しては、ある程度の歩み寄りが求められますが、このシンプルな操作性を考えれば、微々たる物といえるでしょう。ELECTRA DYNE (エレクトラ・ダイン) は、この機能を手に入れた事により、より演奏に集中出来る様になったのです。

ELECTRA DYNE (エレクトラ・ダイン) には、ハーフ・パワーの45ワット・モードと90ワットのサイマル・クラスを選択する、POWER SWITCH (パワー・スイッチ) があります。90ワットのサイマル・クラスでは1組の6L6をクラスABで動作させ、もう1組をエクステンデッド・クラスAで動作させます。45ワット・モードでは外側の1組の6L6をオフにし、内側の1組のみを動作させます。バイアスは低くなりますがクラスABで動作しています。

リア・パネルの右端(後ろから見て)には、ELECTRA DYNE (エレクトラ・ダイン) のライブ・パフォーマンスを高める2つのフットスイッチ機能があります。まず1つ目は、CLEAN LEVEL TRIM (クリーン・レベル・トリム) コントロールです。これは、CLEAN (クリーン) モードの出力レベルを、VINTAGE LO (ビンテージ・ロー) モードとHI (ハイ) モードの時と比べて下げる働きをします。これにより、モードをフットスイッチで切り替えたときのレベル差を設定する事が出来ます。

2つ目は、CLEAN LEVEL TRIM (クリーン・レベル・トリム) コントロールのすぐ下(コンボ・バージョンではすぐ上)にあるGAIN TRIM (ゲイン・トリム) スイッチです。この3段切り替えのスイッチは、各モードゲインをロー・ゲイン、ハイ・ゲイン、それぞれのスタイルに合う様に調整する働きをします。VINTAGE LO (ビンテージ・ロー) モードとHI (ハイ) モードでハイ・ゲインにした場合は、CLEAN (クリーン) モードのゲインをクリーン・サウンドに充分なヘッドルームになる様に“調整”し、反対に、CLEAN (クリーン) モードで甘く太いリズム・サウンドにした場合は、VINTAGE LO (ビンテージ・ロー) モードとHI (ハイ) モードをロー・ゲインのブルース・サウンドになる様に“調整”します。

リア・パネルにある全真空管のREVERB (リバーブ) コントロールを使用すると、全てのモードのサウンドに空間の響きを加える事が出来ます。この機能は、CLEAN (クリーン) モードに於ける響きだけでなく、VINTAGE LO (ビンテージ・ロー) モードとHI (ハイ) モードに於いては一線を越えるパフォーマンスを生み出します。REVERB (リバーブ) つまみ左のスイッチをBYPASS (バイパス) にしてリバーブ回路をオフにすると、イギリス風のサウンド・マニアを満足させるサウンドになります。このスイッチがオンになっている時は、さらに2つの選択肢、REVERB (リバーブ) つまみ右のMODE DEFEAT (モード・デフィート) があります。これは、全てのモードでリバーブをオンにするか、クリーンとハイあるいはクリーンとローのモードでリバーブをオンにする選択です。さらに、シャーシの下の方にあるフットスイッチ・ジャックにチップ・トゥー・グラウンドのフォーン・プラグのフットスイッチを接続することで、リバーブのオン・オフを切り替える事も出来ます。

リア・パネルのBIAS SELECT (バイアス・セレクト) スイッチを切り替えて、4本の6L6を明るいサウンドのEL34パワー管に交換する事が出来ます。このイギリスの伝統的な真空管は、高次倍音と豊かな低音を特徴としていますが、超低域がなくなりますので、サウンドの印象はタイトになります。暖かみがあって多様性に富んだサウンドが欲しかった時の為に6L6を保管しておく事をお勧めします。ノート: BIAS SELECT (バイアス・セレクト) スイッチは、実際に装着している真空管のタイプと合っていないと安普を損傷する可能性がありますし、その場合は保証の対象外になりますので気を付けて下さい。

リア・パネルのFT.SW (フットスイッチ) ジャックには、リモート・マスター・スイッチング・ユニットを接続してモードの切り替えを行います。このスイッチは、チップ・トゥー・グラウンドで動作します。ELECTRA DYNE (エレクトラ・ダイン) は、このリモート・マスター・スイッチング・ユニットを使用する事で、広いステージでのライブにも対応出来ます。

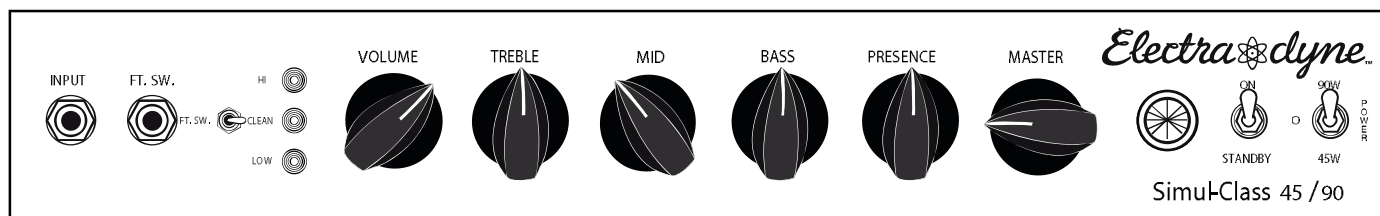
スピーカー・インピーダンスの切り替えは、リア・パネルの小さなトグル・スイッチで行います。スピーカー端子は8オームと4オームに対応しています。メサのキャビネットは、通常8オームか4オームです。ELECTRA DYNE (エレクトラ・ダイン) で16オームのキャビネットを使用する場合は、このスイッチを8オームに設定して下さい。2台の16オームキャビネットを使用する場合も、このスイッチを8オームに設定して下さい。スピーカーを接続する時は、必ずスピーカー・インピーダンスをチェックして下さい。インピーダンスが合っていないとアンプのパワーをフルに引き出せないだけでなく、アンプの真空管の寿命を縮める事にも繋がりますので、注意が必要です。

SLAVE (スレーブ) からは、アンプの全行程 (プリアンプとパワー・セクション) を経たサウンドが出力されますので、エフェクト・プロセッサーや他のパワーアンプに接続する事も出来ます。この出力からは、スピーカー端子への出力を押さえたレベルの信号が、高域の減衰も無く出力されます。またこの出力信号は、ELECTRA DYNE (エレクトラ・ダイン) のフロント・パネルのコントローラー全てでコントロールされたものですので、アンプの設定を視覚的に捉えやすくなっています。

## 始まる前に

### 設定の例

ここでは、ELECTRA DYNE (エレクトラ・ダイン) の基本的な設定について見ていきます。



### ヒント:

1. ELECTRA DYNE (エレクトラ・ダイン) を箱から取り出したら、電源を入れる前にパワー管のプラスチックを外します。
2. 電源コードのタイを解いて電源コンセントに接続します。
3. フットスイッチを本体フロント・パネルのFOOTSWITCH (フットスイッチ) と印刷されているフォーンジャックに接続します。
4. アンプ (最低 1 台のスピーカー・キャビネットが接続されている) を、あなたが立っている (あるいは座っている) 床の上に直接置いて下さい。これで、カップリング・サークルが完成します。こうすることで、手からギター、ギターからアンプ、アンプからギター、ギターから手という共振ループが出来上がるため、気持ちよく演奏出来るだけでなく、アンプの音が良くなります。
5. モードの切り替えをフットスイッチで行いながらコントローラーの調整をする場合は、各つまみを真ん中近辺 (11時から2時) で調整すると、モードを切り替えた時のトーンとボリュームの変化が少なく済むという事を覚えておいて下さい。
6. モードを切り替えると回路構成が切り替わりますが、それぞれのコントローラーは全てのモードで共有しています。そしてそれぞれのコントローラーは、モード毎にそのモードにあった特性に切り替わります。フットスイッチの切り替えに於いてもこの関係は保たれます。実際に音を出してつまみを回してみると、他のアンプでは無かった感覚を味わう事が出来ます。
7. CLEAN (クリーン) モードにおけるコントローラーの中には、緩やかな特性のものがあり、フットスイッチでモードを切り替えるとそのモードに合わせます。例えば、VINTAGE HI (ビンテージ・ハイ) モードでVOLUME (ボリューム) の設定を高め (2時から3時) にしてリード・サウンドあるいはクランチ・リズム・サウンドを使用しているとします。このとき、フットスイッチでCLEAN (クリーン) モードに切り替えると、クリーン・コード・サウンドには相当大きなヘッドルームになります。CLEAN (クリーン) モードにおいては、VOLUME (ボリューム) と BASS (バス) コントロールは緩やかな特性を持っていますので、他のアンプと異なり、少しくらい (約 3 分の 1) 大きめの設定にしても問題ありません。
8. リア・パネルのCLEAN LEVEL TRIM (クリーン・レベル・トリム) コントロールは、CLEAN (クリーン) モードのボリューム (音の大きさ) を、VINTAGE LO (ビンテージ・ロー) モードとHI (ハイ) モードの時と比べて下げる働きをします。この機能は、MASTER (マスター) から独立している訳ではありません。CLEAN (クリーン) モードの時、このコントローラーでフロント・パネルのMASTER (マスター) よりもレベルを上げる事は出来ません。

## 始まる前に(続き)

### ヒント(続き):

9. リア・パネルのGAIN TRIM (ゲイン・トリム) スイッチは、各モードに於けるVOLUME (ボリューム) が極端な設定になっている場合、フットスイッチでモードを切り替える度に、ゲインを自動的に微調整する役割を果たします。例えば、完全に歪んだロック・サウンドや、ロー・ゲインでクリップしたブルース・サウンドを、次のような設定にしてGAIN TRIM (ゲイン・トリム) スイッチを使用します。

1つ目の例のように、VINTAGE LO (ビンテージ・ロー) モードとHI (ハイ) モードのソロ・サウンド用にVOLUME (ボリューム) を高い設定にすると、通常ならCLEAN (クリーン) モードではクリップしてしまいます。

2つ目の例のように、CLEAN (クリーン) モードで最適なVOLUME (ボリューム) に設定すると、通常ならVINTAGE LO (ビンテージ・ロー) とHI (ハイ) モードではロー・ゲインのソロ・サウンドには歪みが強すぎるサウンドになってしまいます。

1) ハイ・ゲイン用にVOLUME (ボリューム) を3時から5時に設定して、GAIN TRIM (ゲイン・トリム) をCLEAN (クリーン) にすると、CLEAN (クリーン) モードで自動的にゲインが下がってクリップしない様になります。

2) ロー・ゲイン用にVOLUME (ボリューム) を1 2時半から2時に設定して、GAIN TRIM (ゲイン・トリム) をVINTAGE LO (ビンテージ・ロー) とHI (ハイ) にすると、VINTAGE LO (ビンテージ・ロー) とHI (ハイ) モードで自動的にゲインが下がって歪みが少なくなります。

10. CLEAN (クリーン) モードに於ける低音域の周波数設定は、他の2つのモードよりも低くなっているため、超低音域のバスのコントロールがより強力になります。ですので、フットスイッチでモードを切り替えた時に変化が大きくなるように、CLEAN (クリーン) モードのBASS (バス) の特性は緩やかにしてあります。CLEAN (クリーン) モードで低音域を強調したい場合は、BASS (バス) を2時より上に設定して下さい。

11. 素早い音の立ち上がりやタイトな低音域、そして攻撃的なサウンドにしたい場合は、REVERB (リバーブ) 回路をバイパスにして下さい。リバーブの真空管の回路は、音に暖かみを与えてくれますが、音の立ち上がりが若干遅くなります。

12. VOLUME (ボリューム) とREVERB (リバーブ) を両方とも、極端に高い設定 (4時半から5時半) にする事は避けて下さい。特にVINTAGE LO (ビンテージ・ロー) とHI (ハイ) モードでは厳禁です。REVERB (リバーブ) はスプリングを採用しており、大きなゲインを入力すると飽和状態になってしまいます。警告を発する訳ではありませんが注意して下さい。これを避ける一番シンプルな方法は、VOLUME (ボリューム) を大きくしたらREVERB (リバーブ) を絞るという事です。

13. CLEAN (クリーン) モードでVOLUME (ボリューム) を目一杯に設定してもクリップが足りない時は、フロント・パネルのPOWER (パワー) スイッチを4 5ワットにして下さい。

14. CLEAN (クリーン) モードでVOLUME (ボリューム) を目一杯 (5時半) に設定してもクリップが足りない時は、TREBLE (トレブル) コントロールも効果的です。サウンドに暖かみを加えたい時は、TREBLE (トレブル) を高め (2時から3時) にして、PRESENCE (プレゼンス) とMID (ミッド) を絞ると良いでしょう。

15. MID (ミッド) コントロールは、中音域だけでなく高音域にも相当影響を与えます。中音域を上げたい場合は、TREBLE (トレブル) とPRESENCE (プレゼンス) を絞って高音域を減衰させることができます。

これでELECTRA DYNE (エレクトラ・ダイネ) の概要は終了です。このあとは、モードとコントローラーに関してより詳しく説明していきます。理解を深めて、自分ならではのサウンドを作り、音楽に生かして下さい。



## フロントパネル: コントロールと特性

### モード:

ELECTRA DYNE (エレクトラ・ダイネ) は、一見するとシンプルなシングル・チャンネルのアンプにしか見えませんが、実際にはフロント・パネルの内側に貴重な回路を隠し持っている、パワフルな 3 チャンネル・フットスイッチ切り替え可能なアンプなのです。3 つのモードは、モード・セレクトの小さなトグル・スイッチで切り替え可能で、各モードは完全に独立したプリアンプで構成されています。3 つのモードは、真空管ステージを部分的に共有する事はありますが、信号経路と回路構成はモードが変わると完全に切り替わります。ELECTRA DYNE (エレクトラ・ダイネ) は、シンプルなコントローラーをセットにして使用する事で、強力なライブ・パフォーマンス能力を手に入れたといえるでしょう。このアンプは同じコントローラーで全ての回路をコントロールしますが、これらのコントローラー専用設計されたカーブ特性は、モード間で大きく異なります。しかし、コントローラーを共有している以上、ある程度の歩み寄りが必要になります。各コントローラーを中位の領域に設定する事で、モードを切り替えた時の変化が気にならないレベルになります。ELECTRA DYNE (エレクトラ・ダイネ) は、ある事を望んでいるプレイヤーのために製作されています。ある事とは、操作は出来る限りシンプルに、しかし可能な限り柔軟性も残しておいてほしいということです。ギタリストのこの難しい要望をかなえる為に ELECTRA DYNE (エレクトラ・ダイネ) は、操作性の良い回転つまみとフットスイッチを採用する事にしました。

### CLEAN (クリーン):

CLEAN (クリーン) は、ELECTRA DYNE (エレクトラ・ダイネ) の 3 つのモードの中で最もゲインが低く設定されており、伝統的なカリフォルニア“ブラック・フェース”の回路を基本にしています。さらにメサの MARK I, MARK V ブギーのクリーン・モードの系譜も色濃く引いており、サウンド的には甘く弾けるような素早い音の立ち上がりの特徴としています。このモードは懐かし  
しのクリーン・リズム・サウンドをターゲットとしており、弾けるような高次倍音を生み出します。また、中音域は明瞭で耳障りが良く、低音域は三次元的に広がっていくようなサウンドになっています。



VOLUME (ボリューム) コントロールを低い (10時半から1時半) 設定にすると、高音域の倍音成分が回路を通して、R&Bやカントリー・ミュージックに最適な、ギターの生の音に近いサウンドになります。

VOLUME (ボリューム) コントロールをこれよりも高くしていくと、低音域と中低音域が豊かになり、音が丸くなって他の楽器との馴染みが良くなります。この領域は、パンチの効いたロック・クリーン・リズム・サウンドに最適です。VOLUME (ボリューム) コントロールを最大値 (5時半) にすると、ピックアップにもよりますが、中低音域がふくよかな太いサウンドになります。また、ヘッドルームがとても小さいので、プリアンプの真空管がクリップ

を起こす可能性が高くなります。アンプの出力音量を大きくすると、プリアンプとパワーアンプの両方でクリップを起こす可能性もあります。CLEAN (クリーン) モードの、このクリップ・サウンドのキャラクターを強調したい場合は、POWER (パワー) スイッチを 4.5ワット・モードにすることで、アンプの出力ボリュームを押しえつつクリップをより大きくする事が出来ます。

CLEAN (クリーン) モードの VOLUME (ボリューム) コントロールのカーブ特性はとても緩やかで、つまみを左に絞りきった状態 (7時半) から 3 分の 2 位 (2時) までは、ゲインが徐々に増していきます。そしてこの領域の上 (2時半から 5時半) はゲインの増え方が急になっていきます。これは VINTAGE LO (ビンテージ・ロー) と HI (ハイ) モードで、VOLUME (ボリューム) コントロールを高めの設定にして、フットスイッチでモードを切り替えて使用する際に重要になります。ほとんどのプレイヤーはハイ・ゲイン・サウンドを好みます。VOLUME (ボリューム) コントロールの緩いカーブ特性はとても良く出来ていて、HI (ハイ) モードではほど良く歪んだリード・サウンドになり、LO (ロー) モードでは攻撃的なロック・クランチ・リズム・サウンドになり、CLEAN (クリーン) モードではヘッドルームが十分な甘いクリーン・サウンドになります。VOLUME (ボリューム) コントロールを 1時から3時の間にしておく事で、3つのモード全てで良いサウンドが得られます。この領域は、ピックアップの出力や弦の太さにも影響されます。

### VINTAGE LO (ビンテージロー):



大西洋を越えたイギリスの伝統的なクランチ・アンプに敬意を払うと同時に、このモードの回路構成は最も激しいサウンドを生み出します。LO (ロー) モードは CLEAN (クリーン) モードと比べて、ゲイン・スケールが大きくなっていますが、アンプ全体で見れば CLEAN (クリーン) モードと HI (ハイ) モードの間になります。

## フロントパネル: コントロールと特性 (続き)

### VINTAGE LO (ビンテージ・ロー、続き):

VOLUME (ボリューム) コントロールを低めに設定すると、中音域が明瞭になり、パンチがあってクリーンなサウンド(9時から10時半)からブリティッシュ・ロック・クラッチの象徴的なサウンド(11時から1時半)まで様々なサウンドを生み出します。VOLUME (ボリューム) コントロールを上げていくと急速にゲインが上がっていき、1時半から3時には中位に歪んだブルース・サウンドになります。さらに上げて3時15分から5時半になると、ビンテージ・リード・サウンドが炸裂します。VINTAGE LO (ビンテージ・ロー) のサウンドは、ELECTRA DYNE (エレクトラ・ダイン) を最も象徴するサウンドであり、この回路が生み出すバラエティーに富んだサウンドは、おそらく伝統的なロックンロールのレコーディングで最もよく使われたサウンドといえるでしょう。

もはやイミテーションとはいえない回路を搭載したELECTRA DYNE (エレクトラ・ダイン) のプリアンプは、高値がついてしまっている過去の遺物を遥かに凌駕するクオリティーを誇り、多くの素晴らしいサウンドを生み出しています。このプリアンプには、メサが特許を有するサイマル・クラスのパワー・セクションを搭載しています! メサの音作りに関する長年に渡るノウハウの蓄積が、このプリアンプには生かされています。このようなアンプは、大西洋の東西を問わず今までありませんでした。ブリティッシュ・クリップ・サウンド向けのEL-34にしても、重厚なサウンドの6L6にしても、サイマル・クラスが新たなサウンド表現の領域に踏み込む事になるのは間違いありません。伝統に於いては確かにイギリス風ですが、パフォーマンスに於いては紛れもなくメサそのものです。

### VINTAGE HI (ビンテージ・ハイ):

このモードは、メサのMARK IやMARK IIアンプが発表された80年代初め頃のイギリスの伝統的な回路に改良を加えたものです。MARK I ブギーはアメリカのアンプのあり方を見直すのに十分なアンプでした。そしてU.Kの回路に対する模索が始まったのです。その頃、南カリフォルニアである男が、イギリスの回路に工夫を加え、真空管のステージを増やし、ゲインを増してそれまでに無かったロサンゼルス流の方法で、新たなサウンドを生み出す事に成功したのです。



この考え方の延長線上にELECTRA DYNE (エレクトラ・ダイン) はあります。そして回路のあらゆる所に改良を加えています。それは私達がいつも心がけている事です。音楽的にも、フットスイッチ・パフォーマンスにも、あらゆる事に着目し改良を続ける事で、新たな次元に足を踏み入れる事が出来るのです。この地道な積み重ねだけが、今まで出来なかった音楽の限界を超える唯一の方法なのです。バイオリンの様に甘いサウンドは、つまみを捻るだけで火を噴きます。ELECTRA DYNE (エレクトラ・ダイン) は、敏感なレスポンスと低音域のダイナミクスさを保持しながら、信じられないほどの明瞭度とハイ・ゲインを実現しています。

VINTAGE HI (ビンテージ・ハイ) は、ELECTRA DYNE (エレクトラ・ダイン) の3つのモードの中で最も大きなゲインを生み出します。そのサウンドはリード・サウンドに最も適していますが、今日のヘヴィー・ミュージックに於いてはクラッチ・リズム・サウンドにも向いています。VINTAGE HI (ビンテージ・ハイ) のゲインは、少し上げるだけで歪み始めます。そのレベルは、VINTAGE LO (ビンテージ・ロー) をフルにした時よりも少し弱い程度です。

VINTAGE HI (ビンテージ・ハイ) モードでVOLUME (ボリューム) コントロールを(9時から12時)にすると、パーカッシブさは残りますが少し歪んだクリーミーなサウンドになります。この領域のサウンドは、ソウルフルなブルース・リズムやリバーブで瑞々しいアンビエンスを加えたソロ・サウンドに最適です。この領域はフットスイッチを使用せずに、ギターのボリュームつまみでクリーン・サウンドとドライブ・サウンドを使い分ける事も出来ます。また、この領域は楽器本来の個性を残しつつ、VINTAGE LO (ビンテージ・ロー) で似たような設定にした時よりも、中低音域が豊かで太いクリーン・サウンドになります。

VOLUME (ボリューム) コントロールを上げていくと、歪み成分が多くなり複雑な倍音成分が加わってサスティーンが長くなります。この領域(12時半から2時半)は、ロック・ソリストが好む、鋭い音の立ち上がりと声の様に自然なサスティーンが両立したサウンドになります。この領域は演奏のフィーリングを出し易く、十分なゲインが音の質感とサウンド・カラーを決定します。さらに、TREBLE (トレブル) と PRESENCE (プレゼンス) を使用して音の立ち上がりと明るさをコントロールし、MID (ミッド) と Bass (バス) で音の丸みと太さをコントロールします。

ノート: 高めの領域(1時半から5時半)にすると、高次倍音が多くなり、ピックアップによっては他のものよりも扱い易くなります。高出力のハンバックング・ピックアップを使用すると、倍音成分が豊富になりオープンで3次元的な広がりのあるサウンドになります。低出力のハンバックングやシングル・コイルのピックアップで特にブリッジ側を使用すると、低音域の核がなくなり薄くざらついた印象のサウンドになります。

## フロントパネル: コントロールと特性 (続き)

VOLUME (ボリューム) コントロールをこの領域まで上げる場合は、ギター自体の出力レベルや周波数特性を知っておく必要があります。それが解っていれば、明るすぎたらTREBLE (トレブル) とPRESENCE (プレゼンス) を押さえ目にする事で対応出来ます。ただしこのような設定にすると、モードを切り替えた時に思わぬサウンドになってしまう可能性があります。そのような場合は、もっと出力の大きなピックアップのギターを使用するか、ピックアップのポジションを変える等して対処する必要があります。サウンドに関する全般的な理解が深まれば、音作りの際に注意するポイントが解る様になり、アンプのゲインに対応する事も出来る様になります。一般的につまみを回して出力を大きくすると、高音域が減衰して中音域が前に出て低音域が豊かな暖かみのあるサウンドになります。さらに、TREBLE (トレブル) とPRESENCE (プレゼンス) を使用することにより、低音域から高音域までバランスのとれたサウンドにする事が出来ます。

プレーヤーの中には、真空管の前段にペダル式のオーバードライブを入れる事によって、出力の小さなビンテージ・スタイルのピックアップにありがちな、音の輪郭がぼやけるという現象を避けようとする人もいます。しかしこの方法だと中音域のゲインが増すので音の輪郭はしっかりしてきますが、高音域が減衰してしまいます。そして場合によっては、ギターのピックアップと最初のプリアンプ真空管の微妙な関係が不安定なものになってしまう可能性があります。ELECTRA DYNE (エレクトラ・ダイネ) に損傷を与える事無く、この問題を素早く解決する完璧な方法があります。

それは純粋にギターの出力を直接真空管に接続する事です (我々は必ずそうします)。これにより、ギターとアンプに一体感が生まれ、素晴らしいダイナミクスと豊かな倍音が生み出されるのです。ただし、良い音を出すには少し経験が必要かもしれません。

VOLUME (ボリューム) コントロールを最も高い領域 (2時半から5時半) にすると、ゲインは究極の状態になっています。アタックはつぶれ、倍音成分は液体の様に流れ、オーバードライブが音の壁を作ります。ブルース・サウンドとはほど遠い、すり潰されて粉々に切り刻まれたサウンドです。リズム・サウンドとして使いたいなら、出力の大きなピックアップを使用すれば、タイトなクランチ・サウンドになります。ソロ・サウンドは空へと舞い上がり、倍音成分は積み重なって成層圏まで達し、サステーンは永遠に伸び続けます。

このモードでゲインの設定を完璧にすると、基音に対して1オクターブ上の倍音が加わりフィードバックが高音域の倍音成分を複雑にします。さらに、TREBLE (トレブル) とPRESENCE (プレゼンス) を使用してサウンドの基本的な個性を形作り、MID (ミッド) とBass (バス) でテイストを加えます。MID (ミッド) コントロールは高音域 (TREBLE (トレブル) よりも少し低い周波数) に大きな影響を与えますので、リード・サウンドやクランチ・リズム・サウンドを微調整する事が出来ます。TREBLE (トレブル) とMID (ミッド) は調整する周波数が近いので、両方を同時に上げ過ぎたり下げ過ぎたりしない様に注意して下さい。

VINTAGE HI (ビンテージ・ハイ) モードでゲインの設定を高くすると、CLEAN (クリーン) モードとVINTAGE (ビンテージ) モードの低音域の周波数設定の違いが解ります。2つのゲイン・モードは低音域の周波数設定が高いのでサウンドが埋もれてしまう事はありません。この設定はアタックの強い音に向いています。反対に低音域の周波数設定が低いCLEAN (クリーン) モードは、豊かな空気感と3次元的な広がりを生み出します。ですから、この高めの周波数に設定された低音域を上げる事をためらわないで下さい。この設定は、ソロ・サウンドの音の立ち上がりを鈍くする事はありませんし、クランチ・リズム・サウンドの切れが悪くなる事はありません。単音でもコードでもタイトさを失う事はありませんし、アグレッシブな演奏をしても音の明瞭度が失われる事はありません。

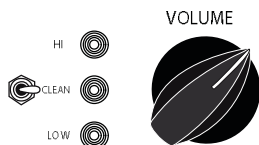
この違いは、2つのVINTAGE (ビンテージ) モードとCLEAN (クリーン) モードの表現力にも現れています。VINTAGE (ビンテージ) モードは、アグレッシブなロック・サウンドに、CLEAN (クリーン) モードは、甘くクリーンなサウンドを表現するのに向いています。たとえどんなギター・サウンドを入力しても、この究極のハイ・ゲイン・アンプは許容してしまいます。

## フロントパネル: コントロール

モードに関する理解が深まった所で、ここからは各コントローラーがサウンドにどのような影響を与えるのかを見ていきましょう。

### VOLUME (ボリューム):

これはELECTRA DYNE (エレクトラ・ダイン) の中で最も強力なコントローラーであり、この設定は3つのモード全てのスタイルと個性を決定します。選択するモードにより異なる真空管ステージのゲインを調整し、入力ヘッドルームを設定します。これによりクリーン・サウンドになるのかオーバードライブ・サウンドになるのかが決まります。また、ほんの少しではありますが、トーン・コントロールの役割も果たします。VOLUME (ボリューム) の大小により多少サウンド・カラーに影響を与えます。



このコントローラーには、VOLUME (ボリューム) コントローラーの、実際の位置の値と回路上の値が異なる様に設定出来る、ギャングド・ポットを使用しています。我々は専用設計のギャングド・ポットのカーブ特性を、様々な音楽スタイルに対応出来る様に微調整する事を日夜続けて参りました。これにより、VOLUME (ボリューム) を1つ設定するだけで、フットスイッチによりモードを

切り替える事が出来るようになったのです。

そこには理想的な動作をする、ある特定の領域がありますので、基本的な手順に従ってゲイン設定を行っていきましょう。例えば、クリーン・リズム/ミッドゲイン・クランチ/シンギング・リードの3種類で考えてみると、この場合、2つから3つの領域の設定になります。1つは12時近辺のロー・ゲイン、2つ目は2時付近の少し歪んだサウンド、3つ目はそれより上のハイ・ゲイン・サウンドとなる訳ですが、これは、3時半より低いどこか1カ所に設定する事で実現出来ます。モードを切り替えながら、3種類のサウンドが少し歩み寄る事で1つのポイントを見つける事が出来るはずです。

### GAIN TRIM (ゲイン・トリム):

リア・パネルにあるGAIN TRIM (ゲイン・トリム) スイッチは、フットスイッチでモードを切り替えた時に音量があまり変わらない様に、モードのゲイン構造を微調整します。CLEAN LEVEL TRIM (クリーン・レベル・トリム) コントロールのすぐ下 (コンボ・バージョンではすぐ上) にあるこの3段切り替えのスイッチは、各モードのゲインをロー・ゲイン、ハイ・ゲインそれぞれのスタイルに合う様に調整する働きをします。いずれの場合でも、減衰させる量はVOLUME (ボリューム) つまみを90度絞る位になります。



スイッチをNORMAL (ノーマル) と表示されている真ん中のポジションにすると、このスイッチの機能はバイパスされ、モードのゲイン構造は自動的に調整される事はなくなります。そしてVOLUME (ボリューム) コントロールにより調整されたゲイン設定がそのまま有効になります。

このスイッチを左に倒してCLEAN (クリーン) にすると、モードがCLEAN (クリーン) になった時にゲインが下がります。例えば、VINTAGE LO (ビンテージ・ロー) やHI (ハイ) で、VOLUME (ボリューム) コントロールを高めに設定して歪んだサウンドを出している状態から、モードをCLEAN (クリーン) に切り替えるとゲインが下がるので、クリップを避ける事が出来るわけです。

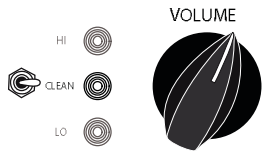
このスイッチを右に倒してVINTAGE LO (ビンテージ・ロー) HI (ハイ) にすると、モードがVINTAGE LO (ビンテージ・ロー) HI (ハイ) になった時にゲインが下がります。例えば、CLEAN (クリーン) でVOLUME (ボリューム) コントロールを12時半から2時に設定して、甘く暖かみのあるサウンドを出している状態から、モードをVINTAGE LO (ビンテージ・ロー) HI (ハイ) に切り替えるとゲインが下がるので、ソロ・サウンドやクランチ・リズム・サウンドが歪みすぎるのを避ける事が出来るわけです。

どちらのポジションが選択されていても、VOLUME (ボリューム) コントロールの位置から90度絞った時のサウンド・キャラクターになります。このつまみを右に回しきった“最大出力”にしたとすると、およそ“90度絞ったゲイン”ですから“未調整”の3分の2位の量になります。

## フロントパネル: コントロール (続き)

### CLEAN LEVEL (クリーン・レベル):

このコントローラーは、CLEAN (クリーン) モードの出力レベルのみを“調整”します。それは、フットスイッチでVINTAGE HI/LO (ビンテージ・ハイ/ロー) モードからCLEAN (クリーン) モードに切り替えた時に、どれくらいレベルを下げるかという事です。この機能は、小さなクラブや自宅でMASTER (マスター) ボリュームを低く設定している時に有効です。



こういった環境では、圧縮されたオーバードライブ・サウンドの方が大きくて広がりがあるにもかかわらず、ダイナミックなクリーン・サウンドの方が大きな音に聞こえます。このようにクリーン・モードのサウンドを大きいと感じる事が多かったら、フロント・パネルのMASTER (マスター) コントロールでハイ/ロー・モードに合わせてレベルを決めて、リア・パネルのCLEAN LEVEL (クリーン・レベル) コントロールで“下げる調整”をして下さい。

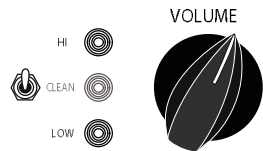
このコントローラーは、CLEAN (クリーン) モードのマスターではありません。このコントロールはフロント・パネルのMASTER (マスター) コントロールと並列になっており、CLEAN (クリーン) モードの出力レベルをMASTER (マスター) コントロールのレベルよりも低くする事は可能ですが、高くする事が出来ません。

CLEAN LEVEL (クリーン・レベル) をバイパスするには、“調整”つまみを右いっぱいBYPASS (バイパス) と表示されている所まで回すだけです。

CLEAN LEVEL (クリーン・レベル) を左いっぱいのTRIM (トリム) と表示されている所まで回しても、フロント・パネルのMASTER (マスター) の設定によっては、小さな音量ではありますが音が出ます。これはフロント・パネルのMASTER (マスター) は常に動作している事を意味しています。この機能は、モードによってボリュームを変えたい時に便利です。フロント・パネルのMASTER (マスター) の調整で十分な場合は、CLEAN LEVEL (クリーン・レベル) コントロールを使用する必要はありません。

### GAIN TRIM (ゲイン・トリム):

リア・パネルのこの3段切り替えのスイッチは、各モードに於けるVOLUME (ボリューム) が極端な設定になっている場合、フットスイッチでモードを切り替える度に、ゲインを自動的に微調整する役割を果たします。CLEAN (クリーン) モード、VINTAGE HI/LO (ビンテージ・ハイ/ロー) モード、各モードのゲインをそれぞれのスタイルに合う様に調整します。いずれの場合でも、減衰させる量はVOLUME (ボリューム) つまみを90度絞る位になります。



スイッチをNORMAL (ノーマル) と表示されている真ん中のポジションにすると、GAIN TRIM (ゲイン・トリム) の機能はバイパスされ、モードのゲインが自動的に調整される事はなくなります。そしてVOLUME (ボリューム) コントロールにより調整されたゲイン設定がそのまま有効になりますので、それぞれのモードでフル・ゲインにする事も出来ます。

このスイッチを左に倒してCLEAN (クリーン) にすると、モードがCLEAN (クリーン) になった時にゲインが下がります。例えば、VINTAGE LO (ビンテージ・ロー) やHI (ハイ) で、VOLUME (ボリューム) コントロールを高めに設定して歪んだサウンドを出している状態から、モードをCLEAN (クリーン) に切り替えるとゲインが下がるので、ヘッドルームが十分に保たれ、クリップを避ける事が出来るわけです。

このスイッチを右に倒してVINTAGE LO (ビンテージ・ロー) HI (ハイ) にすると、モードがVINTAGE LO (ビンテージ・ロー) HI (ハイ) になった時にゲインが下がります。例えば、CLEAN (クリーン) でVOLUME (ボリューム) コントロールを12時半から2時に設定して甘く暖かみのあるサウンドを出している状態から、モードをVINTAGE LO (ビンテージ・ロー) HI (ハイ) に切り替えるとゲインが下がるので、ソロ・サウンドやクランチ・リズム・サウンドが歪みすぎるのを避ける事が出来るわけです。

どちらのポジションが選択されていても、VOLUME (ボリューム) コントロールの位置からゲインが絞られた時のサウンド・キャラクターになります。このつまみを右に回しきった“最大出力”にしたとすると、およそ“90度絞ったゲイン”ですから“未調整”の約3分の2位の量になります。

ノート: HI (ハイ) / LO (ロー) モードのロー・ゲインのブルース/ルーツ/R&BサウンドとCLEAN (クリーン) モードの最適なヘッドルームで暖かみのあるサウンドをフットスイッチで切り替えたい場合: VOLUME (ボリューム) コントロールを2時にして、リア・パネルのGAIN TRIM (ゲイン・トリム) スイッチでHI (ハイ) / LO (ロー) を選択します。こうすると、CLEAN (クリーン) モードでは最適なヘッドルームのサウンドになり、HI (ハイ) / LO (ロー) モードでは(“未調整”の状態から)ゲインが下がります。ゲイン・トリムが掛かる前の設定が2時だったなら、(トリムが有効になっていれば) だいたい11時位にゲインが下がり、ダイナミクスの増したロー・ゲイン・サウンドになります。

## フロントパネル: コントロール(続き)

VOLUME (ボリューム) コントロールを上げていくと、ゲインが素早く音を歪ませていきます。フットスイッチを使用する時に最も一般的なものは、10時半から2時の領域でしょう。この領域では元音の周りを歪み成分が取り囲む様になり、サステーンが長くなりますがアタックは失われていません。この領域では、他のモードに切り替えた時の音量差がほとんど感じられないにもかかわらず、ダイナミックさや表現力を保っている事は称賛に値するでしょう。

ここでもう一度、ピックアップの種類や出力は、このモードの個性やパフォーマンスに大きく影響します。低出力のビンテージ・スタイルのピックアップは、高次倍音を多く含んだオープンなサウンドを生み出しますが、単音のソロ・サウンドに使うには少し明瞭度が劣るかもしれません。高出力のピックアップは、クランチ・リズム・サウンドや空に舞い上がりそうなソロ・サウンドを生み出しますが、ほんの少し中音域が塞がれた様に感じます。

さらにVOLUME (ボリューム) コントロールを上げていくと、オーバードライブが厚くなり高次倍音がさらに増えて、クリーミーなサウンドになっていきます。この最も高い領域(2時から5時半)は、単音をビームの様に、クランチ・コード・サウンドを巨大な壁の様に感じさせます。3時に近づく頃にはダイナミクスが変化し始め、少し圧縮が掛かってアタックが柔らかくなってきます。3時から5時半になると倍音は霞がかかった様になり、サステーンが長くなり、真空管が飽和状態になります。VOLUME (ボリューム) コントロールをここまで高く設定すると、フットスイッチでモードを切り替えた時に音量差が出てしまいます。しかし、オーバードライブの掛かった分厚いサウンドと、一方ではCLEAN (クリーン) モードで瑞々しい倍音成分の清らかなクリーン・サウンドを両立したいなら、方法はあります。

ノート: HI (ハイ) / LO (ロー) モードのハイ・ゲインのロック/メタル/ヘヴィー・サウンドと、CLEAN (クリーン) モードでクリップせずに十分なヘッドルームのあるサウンドをフットスイッチで切り替えたい場合: VOLUME (ボリューム) コントロールを3時から5時にして、リア・パネルのGAIN TRIM (ゲイン・トリム) スイッチでCLEAN (クリーン) を選択します。こうすると、HI (ハイ) / LO (ロー) モードでは最適なサウンドになり、CLEAN (クリーン) モードではゲインが下がります。ゲイン・トリムが掛かる前の設定が3時だったら、だいたい12時位にゲインが下がるのでCLEAN (クリーン) モードでもクリップしません。コントローラーは、一般的なアンプと同様の急なカーブ特性を持っていますので、今まで使用したアンプとあまり変わらない印象のはずです。

### TREBLE (トレブル):

VOLUME (ボリューム) がELECTRA DYNE (エレクトラ・ダイン) の中で最も強力なコントローラーだとしたら、TREBLE (トレブル) は僅差で2番目といえるでしょう。TREBLE (トレブル) はアンプのキャラクターを形作ります。それは他のトーン・コントロールを大きく凌いでいますので、その設定は3つのモード全てに於いて、サウンドの豊かさとバランスを決定付けます。事実、TREBLE (トレブル) の回路のあとにMID (ミッド) とBASS (バス) を通りますので、バルブの役割も果たしています。



TREBLE (トレブル) が高い領域(2時から5時半)に設定されていると、とても明るいキャラクターのサウンドになり、他のトーン・コントロールはほとんど効果がなくなってしまいます。反対に、TREBLE (トレブル) の設定を低くすると、MID (ミッド) とBASS (バス) のコントロールが効く様になり、少し重く、暗い感じにする事も出来るようになります。ですから、TREBLE (トレブル) の設定は注意が必要ですし、トーン・コントロールの中で果たす役割が大きい事を覚えておいて下さい。

TREBLE (トレブル) コントロールは、ELECTRA DYNE (エレクトラ・ダイン) の中で最もギャングド・ポットを効果的に利用しているといえるでしょう。TREBLE (トレブル) のカーブ特性は大きく分けて2つ。CLEAN (クリーン) モード用とVINTAGE LO (ビンテージ・ロー) HI (ハイ) モード用です。この機能により、モードを切り替える際の大きな変化を防いでいるのです。そのおかげで、このアンプはシングル・チャンネル・アンプであるにも関わらず“チャンネル切り替え”のコンセプトを実現する事が出来たのです。

TREBLE (トレブル) は相当強力なコントローラーですので、実際に音を鳴らしながらつまみを触ると、それを実感する事が出来ます。このコントローラーの肝になる事をいくつか押さえておくと、音作りがとても楽になります。

トレブルに関するアドバイス:

1. 一連のトーン・コントロール全てを効果的に使用するには、TREBLE (トレブル) を10時半から1時半に設定すると良いでしょう。我々が好むサウンドのほとんどは、11時45分から12時半の狭い領域に、暗いサウンドのピックアップでマホガニー・ボディーのギターは、1時位にあります。さらに重要なのは、フットスイッチを使ってモードを切り替える場合のTREBLE (トレブル) コントロールの設定は、より狭い領域に限られるという事です。その領域から出てもフットスイッチを使用する事は出来ますが、その場合は、モードを切り替えた時にサウンドの変化が激しくなってしまいます。

## フロントパネル: コントロール(続き)

2.最初の方で述べた様に、MID(ミッド)コントロールは高音域の成分(トレブルの周波数と近いのですが全く同じではありません)を調整します。実際に調整して、音の明るさをコントロールしてみてください。

3. PRESENCE(プレゼンス)コントロールは、トレブルよりも上の周波数をコントロールします。プレゼンスとトレブルは異なる回路ですが、周波数が重なる部分があるのでお互いに関連しています。明るくオープンなコード・サウンドを求めている時には、この2つのコントローラーをうまく使って下さい。TREBLE(トレブル)を上げすぎると、MID(ミッド)とBASS(バス)のコントロールが効かなくなってしまうので注意が必要です。

4. コンボ・バージョンは、TREBLE(トレブル)を高い設定にすると、他のプリアンプよりも高音域が強くなるので、真空管がハウリングを起こしてしまう事があるので注意が必要です。これはアンプを損傷する事はありませんし、真空管を交換する事で解決しますが、ちょっと面倒です。ELECTRA DYNE(エレクトラ・ダイネ)は、製作の過程で真空管を入れ替えて3回のテストを行っており、それに合格した物を出荷しています。真空管は交換出来ますので問題はありますが、コンボ・バージョンのTREBLE(トレブル)の設定に注意されるに越したことはないでしょう。

### モード毎のトレブルに関するアドバイス:

#### クリーン・モード

1. クリーン・サウンドの良い音は、TREBLE(トレブル)を12時近辺にした時に得られます。これよりも高過ぎるとギター之音に角が立ってきます。反対に低過ぎると締まりのないダイナミックさにかけるサウンドになってしまいます。これにMID(ミッド)を少し(8時半から10時半)、PRESENCE(プレゼンス)をもう少し(12時半から3時)加える事で、弾けた様なサウンドになります。

2. CLEAN(クリーン)モードでVOLUME(ボリューム)を右に回しきってクリップ・サウンドにしたい時は、TREBLE(トレブル)を高め(1時半から2時半)に設定して下さい。ただしコンボ・バージョンは、真空管がハウリングを起こしてしまう事があるので注意が必要です。このような設定にすると、MID(ミッド)とBASS(バス)ではほとんどコントロール出来ない事も覚えておいて下さい。BASS(バス)でコントロール出来るのは、8時から9時半位まででしょう。

#### ビンテージ・ロー・ハイ・モード

この2つのモードでは、TREBLE(トレブル)に同じカーブ特性を使用しており、どちらのモードでも同じ様に動作します。

#### ビンテージ・ロー

1. ビンテージ・ローでブルース/ルーツ・サウンドを作るには、TREBLE(トレブル)を中位の11時半から12時半にします。この上の領域(12時半から1時15分)にすると、強いアタックの指すようなサウンドになります。

2. ビンテージ・ローでロックあるいはほとんどメタルのクランチ・リズム・サウンドを作るには、TREBLE(トレブル)を少し高め(12時半から1時半)にします。そうすると、倍音が重なった粉々にすりつぶされたようなサウンドになります。

3. 単音のソロ・サウンドはTREBLE(トレブル)の設定に敏感で、一般的に中位から低め(10時から12時半)に設定すると、丸みのあるボーカルのようなサウンドになります。

#### ビンテージ・ハイ

1. VOLUME(ボリューム)を低めに設定して美しいクリップ・サウンドを得たい場合は、TREBLE(トレブル)を微調整します。強弱を付けて弦を弾いても、音が詰まったような感じにならない様に注意して下さい。ほとんどのギターでは11時45分から12時15分の狭い領域で良い結果が得られるでしょう。ここでバランスがとれたら、ギターのパフォーマンスつまみで微調整して下さい。

## フロントパネル: コントロール (続き)

2. 高いゲインのコード・サウンドは、少し高め(1 2時半から2時)のTREBLE(トレブル)設定を許容し、アグレッシブさと高域の倍音をもたらします。ここでVOLUME(ボリューム)を高く設定してしまうと、MID(ミッド)とBASS(バス)ではほとんどコントロール出来ません。

3. ハイ・ゲインの単音ソロ・サウンド向きの高いTREBLE(トレブル)設定に対しては、ロー・モードよりもハイ・モードの方が感度が鈍いにも関わらず、テイストや鋭さの点でハイ・モードの方が優っているようです。ロー・モード同様に、TREBLE(トレブル)を1 1時から1時半にすると、暖かみがあってまとまりのあるサウンドになります。その上の領域にすると、倍音成分の層が増えて元音と高音域の成分が分離されたようになり音が薄くなってしまいます。このような時は、PRESENCE(プレゼンス)を抑えめにして下さい。

### MID (ミッド):

MID(ミッド)コントロールは、一般的なトーン・コントロールのような働きをします。VOLUME(ボリューム)やTREBLE(トレブル)ほど強力ではありませんが、3つのモード全てのサウンド・キャラクターを後押しする役割を担っています。周波数帯域は広い中音域をカバーしており、その音域を強調するかしないかを調整します。またこの周波数帯は、トレブルの周波数帯の低い方と重なり合っています。この周波数の上限はTREBLE(トレブル)やPRESENCE(プレゼンス)の上限よりも低くなっていますが、音にパンチを与える重要な役割を果たしています。MID(ミッド)もギャングド・ポットを採用していますので、CLEAN(クリーン)モードの時とVINTAGE HI/LO(ビンテージ・ハイ/ロー)の時とは、回路内の値は異なります。しかしコントローラーのカーブ特性は同じです。



CLEAN(クリーン)モードのリズム・サウンドは、MID(ミッド)を低め(7時半から1 0時)に設定して、中音域のアタックと低音域を減衰させると良いでしょう。この領域は弦のしなやかさが直接伝わるので、とても演奏し易くなっています。また、シングル・コイル・ピックアップのギターに向いており、ブルース、R&B、カントリー等のクリーン・スタイルのサウンドを生み出します。

中位の領域(1 0時から1時)にすると、パンチとアタックが強くなり音に緊迫感が出てきます。マホガニー・ギターにはこの設定がとても合います。この領域になると高音域が強調され始め、コード・サウンドにおいては音の切れが前面に出るようになります。

その上の領域(1時から5時半)にすると、MID(ミッド)コントロールが作り出す属音の周波数帯の存在感が増し、よりアグレッシブな押し出しの強いサウンドになります。この領域になると、MID(ミッド)コントロールが高くなるにつれて低音域も増し、サウンドに豊かさと暖かみが出てきます。MID(ミッド)コントロールをこの領域にしたままで、アタックと緊迫感を保つためには、他のトーン・コントロール(最終出力が大きくなってしまうのでMASTERを除く)を高めに設定しなければなりません。しかしこれはある程度の所で譲り合わないとプリアンプのヘッドルームに達してクリップしてしまいます。ですから、そうならない程度に一連のトーン・コントロールを調整する様にして下さい。

VINTAGE HI/LO(ビンテージ・ハイ/ロー)モードにおけるMID(ミッド)の設定は、ゲインと似ています。低め(7時半から1 0時半)の設定にすると、広がるようなサウンドになり、コード・サウンドは弾む様に、ソロ・サウンドはクリーミーで滑らかなサウンドになります。ゲインとTREBLE(トレブル)とPRESENCE(プレゼンス)によって作られた高次倍音が豊かなサウンドは、MID(ミッド)で3次元的に色づけされ艶が出ます。

MID(ミッド)の設定が1 0時を過ぎると、中音域にパンチが出てきます。これはVINTAGE LO(ビンテージ・ロー)モードでVOLUME(ボリューム)コントロールを中位に設定した時の、伝統的なブリティッシュ・クランチ・サウンドに似ています。この中音域の押し出しは、この40年間ロックの基本とされてきたミッド・ゲイン・サウンドの特徴である、はっきりした音の粒立ちとタイトさを保つ為に不可欠です。VINTAGE HI(ビンテージ・ハイ)モードでは、この領域になると、単音のソロ・サウンドは活気を帯びて暖かみが増しジューシーなサウンドになります。さらにVOLUME(ボリューム)の高い設定が加わると、ジェット機の砲煙のような激しさになります。



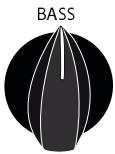
## フロントパネル: コントロール (続き)

1時を過ぎると、閉ざされていた中音域は一気に解放され、高音域と相まって一気に炸裂します。この領域はTREBLE (トレブル) コントロールよりも広い帯域に渡って、押し出しの強いアグレッシブなアタックのサウンドになります。この領域になると、弦を弾いている感覚は少なくなります。VINTAGE LO (ビンテージ・ロー) モードでは、VOLUME (ボリューム) コントロールでゲインを上げたとしても、押しの強いロック・リズム・サウンドを生み出します。VINTAGE HI (ビンテージ・ハイ) に於ける単音のソロ・サウンドは、鋭いアタックのビームのようなサウンドになります。

ここで1つアドバイス。MID (ミッド) コントロールは、耳にとって厳しい周波数帯域を含んでいます。MID (ミッド) を高めに設定して音を鳴らしている状態でスピーカー・キャビネットの高さまで頭を下げると、ちょっと衝撃を受けるか、あるいは耳を痛める事になるかも知れないので注意が必要です。MID (ミッド) は中域から低域をコントロールし、音のアタックや鮮明度を決定すると同時に、サウンドのバランスをとり、音に暖かみを与えてくれます。

### BASS (バス):

MID (ミッド) 同様に、BASS (バス) コントロールも代表的なトーン・コントロールの1つです。BASS (バス) コントロールは、低音域を豊かにしサウンドを丸くします。このコントローラーは、カーブ特性が異なるギャングド・ポットを採用していますので、CLEAN (クリーン) モードとVINTAGE HI/LO (ビンテージ・ハイ/ロー) をフットスイッチで切り替えると、モード毎に最適化されます。モードが切り替わると、内部では回路が切り替わり周波数のボーシングとバスの配分がやり直されます。この違いはサウンド・キャラクターに大きく影響します。



CLEAN (クリーン) モードは、より多くの低音域を受け入れられるので、サウンドに奥行きや空間的な広がりを与える事が出来ます。ハイ・ゲインの回路に多くの低音域をバランスさせる為に、コントローラーは緩やかなカーブ特性になっています。VINTAGE HI/LO (ビンテージ・ハイ/ロー) モードの回路は2つとも、CLEAN (クリーン) モードよりも低音域の周波数帯域が高めに設定されており、アタックのクオリティーが高く、タイトで弾けるようなサウンドになっています。モードによって使用する周波数帯域が異なるので、通常であればコントローラーの設定が大きく変わってしまうのですが、ギャングド・ポットを採用しているため、フットスイッチでモードを切り替えても、違和感無く演奏する事が出来るのです。

CLEAN (クリーン) モードで、音の土台をしっかりさせてサウンドに暖かみを与えたい場合は、BASS (バス) コントロールでバランスを調整しますが、やりすぎるとアタックが弾けてしまうので注意が必要です。VOLUME (ボリューム) コントロールにもよりますが、VOLUME (ボリューム) を低めに設定すると、BASS (バス) を高めに設定する事が出来ます。次にその設定のガイドラインを示しますが、基本的にVOLUME (ボリューム) を上げたらBASS (バス) を絞って下さい;

VOLUME (ボリューム) が 1 2 時の時 - BASS (バス) は 1 時半

VOLUME (ボリューム) が 1 時の時 - BASS (バス) は 1 時

VOLUME (ボリューム) が 2 時の時 - BASS (バス) は 1 2 時

フットスイッチを使用してモードを切り替える事により、CLEAN (クリーン) モードでクリーン・リズム、VINTAGE LO (ビンテージ・ロー) モードでクランチ・リズム、VINTAGE HI (ビンテージ・ハイ) モードでシンギング・リードを実現している。これはほとんどのギターにとっての理想であり、バランスのとれた設定といえるでしょう;

VOLUME @ 2時、 TREBLE@12時、 MID@10時、 BASS@12時、 PRESENCE@12時、 MASTER@9時15分

MASTER (マスター) は最終的な音量設定ですので、それを除いたトーン・コントロールは、この設定をスタートラインとして調整していくのが良いでしょう。

## フロントパネル: コントロール (続き)

VINTAGE HI/LO (ビンテージ・ハイ/ロー) モードのBASS (バス) コントロールは、CLEAN (クリーン) モードと比べて、周波数設定が高くなっています。BASS (バス) の設定は 12 時から 3 時を基本とします。BASS (バス) の設定を高くしたい場合は、VOLUME (ボリューム) の設定を低くして下さい。VOLUME (ボリューム) を 9 時半から 12 時にしてゲインを下げると、サウンドがタイトになります。豊かな低音が欲しい場合は、BASS (バス) を上げて下さい。反対に VOLUME (ボリューム) を 12 時から 5 時半に上げると、ゲインにより歪み始め音が太くなりますので、この場合は BASS (バス) を絞って、低音が緩い雰囲気にならない様にして下さい。

### PRESENCE (プレゼンス):

このコントローラーは、パワー・セクションでのネガティブ・フィードバックをコントロールします。これにより、明るさの要素になる高次倍音をパワー・セクションに送ったり閉じたりする事が出来ます。このコントローラーは全体をコントロールしますので、ギャングド・ポットではありません。ですから全てのモードに等しく働き、最終的にサウンドを明るくしたり暗くしたりします。このコントローラーは、1 つのつまみで、演奏する部屋の大きさや観客の数に応じて、ELECTRA DYNE (エレクトラ・ダイン) 全体のサウンド・キャラクターを微調整します。

PRESENCE



PRESENCE (プレゼンス) を低め (7 時半から 10 時半) に設定すると、パワー・セクションの明るさとダイナミック・レスポンスが下がります。その結果ダイナミクスが圧縮されて高次倍音がなくなるので、暖かみのある太いサウンドになります。この設定は、CLEAN (クリーン) モードに於いては暖かみのあるコードサウンドになり、VINTAGE HI/LO (ビンテージ・ハイ/ロー) モードに於いては丸いボーカル・ソロ・サウンドになります。

中位の領域 (11 時から 1 時半) に設定すると、高次倍音が出始め、パワー・セクションがプレーに対してダイナミックなレスポンスを示す様になります。全てのモードのサウンドが明るくなり、ライブに於いても他の楽器に埋もれないようなアンプの出力の押しが強力になってきます。また、あらゆる反応が“速く”なるので、ピッキングに対する音の立ち上がりも、追従性も上がります。

PRESENCE (プレゼンス) を高め (1 時半から 5 時半) に設定すると、パワー・セクションは完全に解き放たれた状態になり、高次倍音のすべてが信じられないほど強力に出力されます。この領域になると、アタックがきつくなり音量も大きくなるので注意が必要です。PRESENCE (プレゼンス) をここまで極端な設定にする事は滅多に無いとは思いますが、この設定は究極の攻撃的なサウンドになります。

PRESENCE (プレゼンス) の設定は、9 時半から 12 時 45 分くらいにする事を推奨します。この位が音楽的にもベストですし、フットスイッチを使用するにもバランスがとれています。この領域内であれば、楽器そのものも活きますし、サウンドはタイトでダイナミックさを失う事ありません。さらに、真空管の自然なコンプレッションで、弦を弾いた感覚も保たれます。

### MASTER (マスター):

このコントローラーは、ELECTRA DYNE (エレクトラ・ダイン) の最終的な出力レベル (演奏レベル) を決定します。これはプリアンプからパワー・セクションへの入力レベルの調整を意味します。このコントローラーはギャングド・ポットを採用していますので、フットスイッチでモードを切り替えた時の変化が小さくなる様に、値とカーブ特性が調整されています。

MASTER



ELECTRA DYNE (エレクトラ・ダイン) はとても強力なアンプですので、MASTER (マスター) コントロールはとても感度が高くなっています。このコントロールは 9 時を過ぎると急激に音量が上がっていきますので、STANDBY (スタンバイ) から ON (オン) にする時は必ずチェックする事を心がけて下さい。これを怠ると“ハイ・ボリューム・ショック”で耳を痛めたり、スピーカーを破損する恐れがあります。

モード間の (音量の) バランスは、通常“ギグ・ボリュームの平均値”であり、それは 9 時半から 10 時半の間になります。この設定にするとパワー管は快適に動作し、より良いサウンドが出力されます。しかしこのレベルではアンプのパワーを全然使い切っておりませんし、クリップもしていません。モード間のボリューム・レベルのバランスを完璧にし、さらに MASTER (マスター) ボリュームの全領域を使い切るというのは不可能といえるでしょう。

## フロントパネル: コントロール (続き)

パワー・セクションは、EQカーブ特性やモードの切り替えに応じて動作が変化します。実際はダイナミックなサウンドの方が大きいのに(歪んだオーバードライブ・サウンドよりもクリーン・サウンドの方がダイナミックです)、オーバードライブ・サウンドの方が大きく、広がりがあるように感じます。この様に内部ではモード毎の差異を無くす様に動作していますが、パワーアンプで全ての差異を吸収しきる事は出来ません。

リアパネルの左端(コンボ・バージョンは右端)にあるCLEAN LEVEL (クリーン・レベル) “調整”つまみは、VINTAGE HI/LO (ビンテージ・ハイ/ロー) モードに対してCLEAN (クリーン) モードの出力レベルを下げる働きをします。

このレベルは“マスター”ではありません。それは、このコントロールがフロント・パネルのMASTER (マスター) コントロールと並列になっており、CLEAN (クリーン) モードの出力レベルをMASTER (マスター) コントロールのレベルよりも高くする事が出来ないからです。CLEAN LEVEL (クリーン・レベル) コントロールは、クリーン・モードとハイ/ロー・モードのバランスをとるのに効果的です。特に出力音量を小さくしたい、自宅での練習時や、小さなクラブでの演奏時に最適です。

こういった環境では、圧縮されたオーバードライブ・サウンドの方が大きくて広がりがあるにもかかわらず、ダイナミックなクリーン・サウンドの方が大きな音に聞こえます。このようにクリーン・モードのサウンドを大きく感じる事が多ければ、フロント・パネルのMASTER (マスター) コントロールでハイ/ロー・モードに合わせてレベルを決めて、リア・パネルのCLEAN LEVEL (クリーン・レベル) コントロールで“下げる調整”をして下さい。

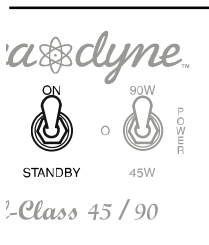
ノート: CLEAN LEVEL (クリーン・レベル) を右回しきりにすると、この回路はバイパスされこの機能は全く動作しません。

ノート: CLEAN LEVEL (クリーン・レベル) を左回しきりにしても、フロント・パネルのMASTER (マスター) コントロールが8時よりも上になっていれば、低レベルではありますが信号は出力されます。

ノート: CLEAN LEVEL (クリーン・レベル) でCLEAN (クリーン) モードの出力レベルが下げられていても、フロント・パネルのMASTER (マスター) コントロールは常にアクティブになっています。これは各モードのレベルが2つのコントローラーによって制御されている事を意味しています。フロント・パネルのMASTER (マスター) でコントロール出来る場合は、CLEAN LEVEL (クリーン・レベル) コントロールを使用する必要はありません。

## STANDBY (

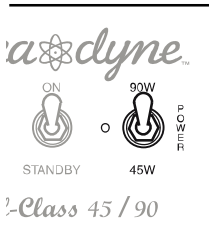
このトグル・スイッチは大変重要な役割を担っています。このスイッチがスタンバイの位置にある時は、真空管はまだ準備段階で、ウォームアップをしています。電源を入れる時は、このスイッチがスタンバイの位置にある事を確認して下さい。



電源を入れてから、最低30秒の時間をおいてから、このスイッチをオンにする様にして下さい。そうすることで、真空管のトラブルを予防出来ますし、良い音で使用出来る期間が長くなります。

## POWER (電源): 90W / 45W

電源スイッチは、3つのポジションで切り替えられるトグル・スイッチを使用しています。このスイッチはAC電源をELECTRA DYNE (エレクトラ・ダイン) に供給すると同時に、サイマル・クラス・パワー・セクションの選択を行います。このスイッチを真ん中の“0”と表示されている位置にすると、電源がオフになります。



真空管のトラブルを予防する為に電源を入れてから、最低30秒の時間をおいてから、このスイッチをオンにする様にして下さい。

90Wのポジション(上)にすると、メサが特許を所有するサイマル・クラスで最大90ワットの動作をし、大きなパワーとヘッドルームのクリーンで甘いサウンドを生み出します。このポジションでは、4本のパワー管を全て駆動し2つの異なるクラスで同時に動作させることで、最も音楽的な“100ワット”ステージを実現しています。

## フロントパネル: コントロール (続き)

外側のペアー (左から 2 番目と右端) はクラスABで動作し、発熱量を抑えながら大出力を稼ぎだします。この現代的な真空管の駆動方式は、少ない発熱で大きなパワーを得る最も効率的な方法です。

内側の真空管ペアーはバイアスを減らした“拡張クラスA”で動作しており、信号がある時でも無い時 (演奏していない時) でも常に動作しています。この動作クラスとバイアス・スタイルは、パワーが少ない割に発熱量が多くなります。そのかわり多くのメリットもあります。それは、クリップ特性を滑らかにしてくれる事と、サウンドに暖かみを加えてくれるという事です。特に、クラスAB の出力セクションで発生する、どぎつい過度特性を持ったクリップを和らげる働きをします。サイマル・クラスはサウンドの粗い角を滑らかにして、高音域をボーイングし直します。これにより耳障りなクリップを音楽的な柔らかいクリップ・サウンドにするのです。90 W (サイマル・クラス) ポジションは、最もライブ・パフォーマンスに適しており、大きなヘッドルームを必要とするクリーン・コード・サウンドやタイトで明瞭な低音域を特徴とするクランチ・リズム・サウンド、そして甘くてボーカルのようなソロ・サウンドを生み出します。

45 W のポジション (下) にすると、真ん中の6L6のペアーだけを使用し、バイアスを減らした拡張クラスAで動作します。動作中は少し熱を持ちますが、クリップし始めのサウンドを滑らかにします。

45 W のポジションは、プッシュド・リズム・サウンドやクリップし始めのサウンドを滑らかにし、ざらつきの無い高音域が弾けるようなサウンドを生み出します。このポジションは、ブルース、ルーツ、クラシック・ロック等の単音ソロ・サウンドに最適で、プリアンプの歪みではなく本物のパワー・クリップ・サウンドになります。45 W の設定は、ギグにぴったりのボリュームであり、懐かしのオーバードライブ・サウンドになります。

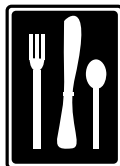
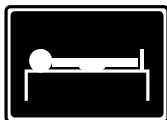
ELECTRA DYNE (エレクトラ・ダイン) の 90 ワット・サイマル・クラスのパワー・モードのレスポンスは、豊かな低音域とタイトな追従性と明瞭度を誇りますが、45 ワット・モードはパワー・クリップ・サウンドや弾けるようなソロ・サウンドに威力を発揮しますので、その状況に合わせて使い分けて下さい。

ノート: メサ往年の名器 MARK シリーズ・アンプと異なり、ELECTRA DYNE (エレクトラ・ダイン) は全てのパワー管に同じタイプの真空管を使用し、それに合わせたバイアスの設定をします。BIAS (バイアス) スイッチは、パワー管を 4 本全て 6L6 にするか、EL34 にするかを選択します。真空管ソケットにペアーで装着する際に、タイプを混ぜると全く暖まらなかつたり熱くなり過ぎたりするので、混ぜないで下さい。混ぜると、真空管スタイルの違いからサウンドは悪くなりますし、アンプを損傷する可能性があります。

**危険: BIAS (バイアス) スイッチは、必ず装着しているタイプに合わせて下さい!**

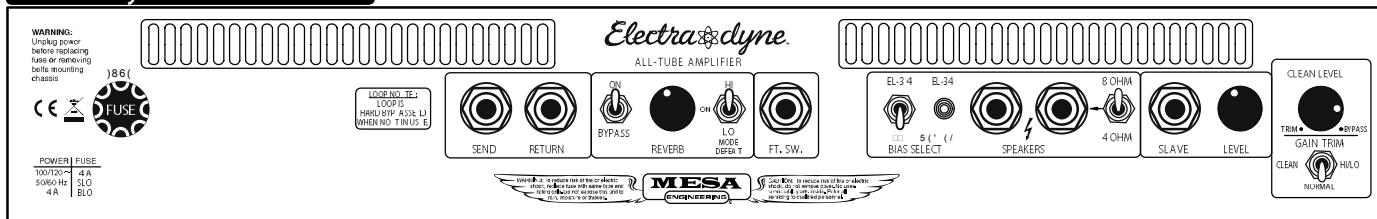
さあ、ELECTRA DYNE (エレクトラ・ダイン) のフロント・パネルの機能について理解を深めた所で、ここからは同じ様にリア・パネルの機能について見ていきましょう。

## 休息場



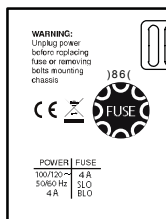
## バックパネル: コントロールと特性

### Electra Dyne 45/90 Combo



### FUSE (フューズ):

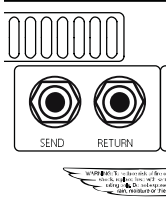
これは、メイン・ヒューズです。ヒューズは、外的要因による電源の過大入力からパワー管を保護する役割を担っています。ヒューズを交換する場合は、Slo-Bloタイプの同じ規格のものを使用して下さい。度々パワー管がショートしたり破損したりする場合は、ヒューズがとんでいる可能性が高いのでチェックして下さい。ON/STANDBY (スタンバイ) セクションの説明に従ってスタンバイ・スイッチをオンにしてもパワー管が正常な動作をしない場合は、即座にスタンバイ・スイッチをスタンバイに切り替えて、パワー管を交換し必要であればヒューズも一緒に交換して下さい。



スタンバイ・スイッチをオンにしても異常が見られないようであれば、真空管が一時的にショートしてヒューズがとんだ可能性があります。このような場合は安全の為に、隣の真空管、あるいは全ての真空管を交換してみるのも良いかもしれません。この場合、交換した真空管は予備として保管しておきましょう。また、ヒューズの予備は必需品です。

### EFFECTS LOOP (エフェクトループ):

Electra Dyneでは、外部のエフェクト・プロセッサを使用する事が出来ます。この回路は、プリアンプとパワー・セクションの間に直列に接続されます。接続は直列 (プリアンプの出力がエフェクト・プロセッサに入力され、その出力がパワー・セクションに戻ります) ですので、エフェクト・プロセッサのクオリティーがとても重要になります。



エフェクト・プロセッサのクオリティーが低いと、アンプの出力のクオリティーも落ちてしまいます。この端子の入出力インピーダンスは、市場に出回っているほとんどのプロセッサと互換性がありますので、そんなに高級な製品でなくても大丈夫です。ただし、エフェクト・プロセッサのクオリティーが出力のクオリティーに大きな影響を与える事は覚えておいて下さい。

ノート: 接続に使用するケーブルは、品質が良く出来ただけ短い物を選んで下さい。長さの目安は90センチと考えて下さい。90センチを超えると高域の減衰が始まり、中高域のパンチと高域の明瞭度が落ちてきます。

エフェクト・ループの使用方法:

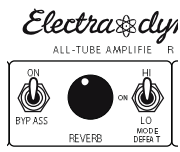
- 1) SEND ( SEND ) ジャックとエフェクト・プロセッサの入力を接続します。
- 2) RETURN ( リターン ) ジャックとエフェクト・プロセッサの出力を接続します。
- 3) リターン側のケーブルを抜き差しして、レベルが同じになる様にエフェクト・プロセッサの入出力レベル・アッテネーターを調整します。

ノート: エフェクト・ループは、プロフェッショナル仕様のラック・マウント・プロセッサの適正レベルに調整されています。ペダル・タイプのエフェクターを使用される場合は、フロント・パネルの入力端子に直列 (楽器の出力をエフェクターに入力して、エフェクターの出力をアンプの入力端子) に接続して下さい。エフェクト・プロセッサを接続する事で音質が変わりますが、これはある程度仕方の無い事です。それでもエフェクト・プロセッサを使用するかどうかを判断するしかありません。

## バックパネル: コントロールと特性 (続き)

### REVERB (リバーブ):

リア・パネルのこのセクションでは、全真空管リバーブのアサインと残響成分のミックス・バランスをコントロールします。ELECTRA DYNE (エレクトラ・ダイン) は、この機能を“ハード”バイパスすることにより、真空管ステージまで含めたリバーブ回路をオフにする事が出来ます。これによりレコーディングの時等、ビンテージのアタックとパンチの効いた、プリティッシュ・ルーツのストレートなサウンドを欲しい場合にも対応出来ます。リバーブ回路を切り替える事で、微かなアンビエント効果から甘美なリバーブ効果まで様々な効果を生み出す事が出来ます。



リバーブは、次の様に3通りのアサインが可能です; ON (オン) は全てのモードで有効、LO (ロー) あるいは HI (ハイ) の時は選択した方をバイパス、BYPASS (バイパス) は全てをバイパス。小さなトグル・スイッチを ON (真ん中) にすると、3つのモード全てにおいてリバーブ回路が有効になります。トグル・スイッチを LO (下) にすると、LO (ロー) モードではリバーブが自動的にバイパスされ VINTAGE HI (ビンテージ・ハイ) と CLEAN (クリーン) モードでのみリバーブが有効になります。トグル・スイッチを HI (上) にすると、HI (ハイ) モードではリバーブが自動的にバイパスされ VINTAGE LO (ビンテージ・ロー) と CLEAN (クリーン) モードでのみリバーブが有効になります。LO (ロー) あるいは HI (ハイ) が選択されている時は、リバーブ回路は動作しており、この時のバイパスはあくまでもミュートになります。

リバーブを自動的にバイパスする機能は、例えば CLEAN (クリーン) モードのリズム・サウンドと HI (ハイ) モードのリード・サウンドにリバーブをかけて、LO (ロー) モードのクランチ・リズム・サウンドをドライにする、あるいはその反対に CLEAN (クリーン) と LO (ロー) にリバーブをかけて HI (ハイ) をドライにするといった事を実現します。

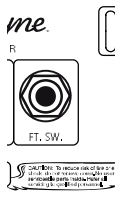
モードを切り替えた時のリバーブのバランスは、1つのリバーブ設定になりますが、全てのモードに驚くほどマッチします。1つのミックス・コントロールが、シンプルな操作と回路を実現しているのです。

フットスイッチによるリバーブのミュート機能もあります。シャーシの真空管側にあるフットスイッチ用のフォーン端子に、チップ・トゥー・グラウンドのラッチ・タイプのフットスイッチ (別売) を接続すると、リバーブのオン/オフをフットスイッチで切り替える事が出来ます。

VINTAGE HI/LO (ビンテージ・ハイ/ロー) モードで、VOLUME (ボリューム) を4時半から5時半、REVERB (リバーブ) も5時から5時半という様に両方を同時に極端な設定にしないで下さい。このような設定にすると、キンキンしたサウンドになり、信じられないほど多くの高次倍音が生成されてしまいます。REVERB (リバーブ) VOLUME (ボリューム) のどちらか、あるいは両方を絞る事によりこの問題は解決しますし、その方がリバーブ効果も心地良くなります。このアドバイスを無視したとしても、サウンドが奇妙なものになるだけで、アンプを損傷するような事はありません。

### FT. SW. (フットスイッチ):

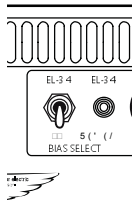
このジャックはフロント・パネルのフットスイッチジャックと直接接続されています。ELECTRA DYNE (エレクトラ・ダイン) のラック・シャーシ・バージョンやカスタム・ラックにヘッドを設置している場合には、リア・パネルのこの端子にケーブルを接続して下さい。フットスイッチをこのジャックに接続する場合は、同梱のステレオ・ケーブルを使用して下さい。



ノート: パワー管を交換した時は常に、正しい真空管がこのスイッチで選択されている事を確認して下さい! この設定を誤ると、アンプを損傷する事がありますので注意して下さい。

### BIAS SELECT (バイアス・セレクト):

このスイッチは、4本の EL34 パワー管を保管してある 6L6 パワー管に交換する際に使用します。ヨーロッパ・スタイルの EL34 のサウンド・キャラクターは、アメリカン・スタイルの 6L6 と全く異なります。6L6 は、中高域が個性的で、低音域のレスポンスに優れ、高次倍音が強調されたサウンドになっています。緊迫感があり攻撃的な印象のサウンドは、メディアム・ゲインのコード・サウンドに最適です。



3つのモード全てにおいて最もバランスのとれたサウンドは、6L6 パワー管により生み出される、美しいクリーン・サウンド、太いクランチ・リズム・サウンド、そして丸いボーカル・リード・サウンドといえるでしょう。

## バックパネル: コントロールと特性 (続き)

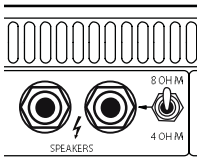
6L6は VOLUME (ボリューム) コントロールと BASS (バス) コントロールの両方を高い設定にする事が出来ます。EL34は豊富な高音域を生み出しますが、ハイ・ゲインのメタル・サウンドに必要な低音域に関しては十分とはいえません。しかし、低音域やゲインをそれほど必要としない、音の立ち上がりが早くギター本来の音を生かすタイプのロック・サウンドを望んでいるなら、EL34のスラッシュ・サウンドは最適といえるでしょう。

トグル・スイッチで EL34 BIAS (バイアス) を選択すると、赤い LED が点灯し EL34 の BIAS (バイアス) 動作をしている事を示します。6L6 パワー管を装着している時は、この LED が消灯している事を確認して下さい。

ノート: パワー管を交換した時は常に、正しい真空管がこのスイッチで選択されている事を確認して下さい! この設定を誤ると、アンプを損傷する事がありますので注意して下さい。

### SPEAKERS (スピーカー): 8 オーム/4 オーム

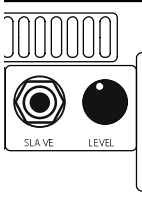
8 オーム/4 オーム このジャックにスピーカー・キャビネットの出力を接続し、その出力インピーダンスに合わせてトグル・スイッチを設定します。インピーダンス・マッチング・スイッチは、8 オームか 4 オームの選択をします。このスイッチはアンプの動作中に切り替えても、アンプを損傷する事はありません。むしろ切り替える事により、インピーダンスのミスマッチによる ELECTRA DYNE (エレクトラ・ダイン) のサウンド・キャラクターの変化が解ります。



1x12 コンボや、メサ 4x12 のスピーカー・キャビネットを使用する場合は 8 オームに設定し、8 オームのスピーカー・キャビネットを 2 台使用する場合は 4 オームに設定します。メサのキャビネットはほとんど 8 オームですが、2x12 キャビネットの中には 4 オームの製品がいくつかあります。他メーカーの製品で 16 オームのものは 8 オームの端子に接続して下さい。ただしこの場合は、アンプの出力を全て使い切る事は出来ません。16 オームのキャビネットを 2 台使用する場合は、合成抵抗が 8 オームになりますので、インピーダンスのマッチングがとれます。

### SLAVE (スレーブ) 出力/レベル

このフォーン端子からは、LEVEL (レベル) コントロールされたアンプの全行程 (プリアンプとパワー・セクション) を経たサウンドが出力されますので、エフェクト・プロセッサーや他のパワーアンプに接続する事も出来ます。スピーカー端子への出力を押さえたレベルの信号が、接続する機器のレベルに合う様に LEVEL (レベル) コントロールで調整されて出力されます。



SLAVE (スレーブ) 出力は“スピーカー・シミュレーション”ではありませんので、この信号を“レコーディング出力”として使用する事は出来ません。ギター用のスピーカーは高音域の 1 番高い所がかなり減衰しますし、超低音域に関しても再生仕切れません。そのため、ギター・アンプはかなり高域が強調された特性になっています。また、出力信号のレベルそのものも相当高くなっていますので、SLAVE (スレーブ) のレベル・コントロールでかなり抑えないと、ミキサーのインプット・セクションでオーバーロードして損傷を与えてしまう可能性があります。SLAVE (スレーブ) 出力は、他のアンプやエフェクト・プロセッサーに接続する様にして下さい。

ノート: SLAVE (スレーブ) 出力を使用してエフェクト・プロセッサーに接続する場合は、その出力は EFFECTS RETURN (エフェクト・リターン) に接続しないで下さい。それをするとフィードバック・ループが発生し、高音のハウリングが起こります。

ノート: SLAVE (スレーブ) 出力を使用する場合は、必ず SLAVE (スレーブ) レベルを絞りきった状態から徐々に上げる様にして下さい! SLAVE (スレーブ) から出力される信号のレベルはとても高いので、この設定が高くなっていると、いきなり大きな音が出て耳を痛めたり接続されている機器を損傷する可能性があります。SLAVE (スレーブ) 出力に機器を接続する時は必ず SLAVE (スレーブ) レベルが絞られている事を確認して下さい。

## バックパネル: コントロールと特性 (続き)

### VOLUME (ボリューム) - CLEAN (クリーン) モード:

CLEAN (クリーン) モードでは、このコントローラーのカーブ特性はとても緩やかなので、とても高い設定にしなるとソフト・クリップやブレイク・アップは起こりません。そのおかげで、VINTAGE LO (ビンテージ・ロー) HI (ハイ) でクラッチ・リズム・サウンドやリード・サウンドを生み出すのに十分なゲインが得られるほどつまみを回しても、CLEAN (クリーン) モードモードに切り替えた時に美しいコード・サウンドを奏するのに十分なヘッドルームを確保する事が出来るのです。CLEAN (クリーン) モードでVOLUME (ボリューム) を2時に設定する例は多くのプレーヤーにとって参考になるでしょう。ギターのリックつまみの設定やピックアップによってサウンドをコントロールする場合は、この位からフルまでの設定が出来ますが、フットスイッチでモードを切り替える場合は、これ以上には設定しない方が良いでしょう。



ノート: HI (ハイ) / LO (ロー) モードのロー・ゲインのブルース/ルーツ/ R&BサウンドとCLEAN (クリーン) モードの最適なヘッドルームで暖かみのあるサウンドをフットスイッチで切り替えたい場合: VOLUME (ボリューム) コントロールを2時にして、リア・パネルのGAIN TRIM (ゲイン・トリム) スイッチでHI (ハイ) / LO (ロー) を選択します。こうすると、CLEAN (クリーン) モードでは最適なヘッドルームのサウンドになり、HI (ハイ) / LO (ロー) モードではゲインが下がります。ゲイン・トリムが掛かる前の設定が2時だったら、だいたい11時位にゲインが下がります。

CLEAN (クリーン) モードのVOLUME (ボリューム) コントロールは、高次倍音を加えられた“明るい”クリーン・コード・サウンドや美しいクリーン・ボイス・サウンドになる様に調整されています。明るさが最も効果的になるのは、2時よりも低い領域であり、ゲインがこの領域でコントロールされていればクリップを起こす事ありません。VOLUME (ボリューム) コントロールが2時を超えると、明るさの要素は徐々に少なくなっていく、5時半になるともうなくなってしまいます。ですのでCLEAN (クリーン) モードのVOLUME (ボリューム) コントロールは、あまり上げ過ぎない方が良いでしょう。

VINTAGE LO (ビンテージ・ロー) HI (ハイ) モードで使用される回路は構成がわりと似ており、抵抗は同じ物が使用されています。コントローラーは、一般的なアンプと同様の急なカーブ特性を持っていますので、今まで使用したアンプとあまり変わらない印象のはずです。

### VOLUME (ボリューム) - VINTAGE LO (ビンテージ・ロー) HI (ハイ) モード:

LO (ロー) モードでは、ゲインは徐々に上がり、このモードでは伝統的なイギリスの回路のサウンドをたくさん表現する事が出来ます。ちょっとブレイク・アップしたサウンドから粉々のクラッチ・リズム・サウンド、そして伝統的なリード・サウンドまで幅広く網羅しています。そして、9時から11時位では“もう一つのクリーン・サウンド”にもなります。そこから徐々にゲインを上げていくとやがて歪み始め、それがオーバードライブ・サウンドへと変化していきます。



低出力のビンテージ・スタイルのピックアップを使用して、この設定を11時から1時半にすると、素敵なブルージー・リズム・サウンドやリード・サウンドを生み出します。これらのサウンドには、TREBLE (トレブル) でゲインを追加したり、BASS (バス) で低音域の空気感を加えたり、ふくよかな雰囲気を出す事が出来ます。

この段階ではまだ他のトーン・コントロールを加える余地が残されています。この領域にして、高出力のピックアップをブリッジ側で使用すると、タイトで伝統的なロック・クラッチ・リズム・サウンドになります。また、ギターのリックつまみで、クリーン・サウンドとメディアム・ゲイン・リード・サウンドを使い分けるという、“懐かしのチャンネル切り替え”方法も可能です。高い領域 (1時半から5時半) では、ゲインと高次倍音が滑らかに増加し、攻撃的でありながら歪み過ぎていないダイナミックなリズム・サウンドやリード・サウンドを生み出します。そこにはまだアタックと弦本来の音が残っており、VINTAGE HI (ビンテージ・ハイ) モードと比べると、中音域が強調された雰囲気が少なくなっています。ギターの個性も色濃く残っており、EQの特徴は“ビンテージ”カーブになっています。

VINTAGE HI (ビンテージ・ハイ) モードはゲインがゆっくり上がり、低い領域 (9時から10時半) におけるVOLUME (ボリューム) コントロールはタイトになります。そして中位の領域になると、LO (ロー) モードとは異なるユニークさが出てきます。それはLO (ロー) モードとは異なるカラーとフィーリングのハウリング・ブルース・サウンドです。これは中音域のブーストが生み出す滑らかな歪みによりもたらされます。また、フレットや低出力のピックアップに起因する“全ての穴を埋め”、“ノイズ”



## バックパネル: コントロールと特性(続き)

ノート: HI (ハイ) / LO (ロー) モードのハイ・ゲインのロック/メタル/ヘヴィー・サウンドと、CLEAN (クリーン) モードでクリップせずに十分なヘッドルームのあるサウンドを、フットスイッチで切り替えたい場合: VOLUME (ボリューム) コントロールを3時から5時にして、リア・パネルのGAIN TRIM (ゲイン・トリム) スイッチでCLEAN (クリーン) を選択します。こうすると、HI (ハイ) / LO (ロー) モードでは最適なサウンドになり、CLEAN (クリーン) モードでは(“未調整”の状態から)ゲインが下がります。(トリムが有効になっていれば) だいたい 1 1 時位にゲインが下がるのでCLEAN (クリーン) モードでもクリップしません。

これでELECTRA DYNE (エレクトラ・ダイン) の機能と操作についての説明は終了です。あとは実際に演奏をして音を出して下さい! 私達はあなたがELECTRA DYNE (エレクトラ・ダイン) に触発されて素晴らしい音楽を作られる事を心から願っています。

## スピーカー・インピーダンス・マッチングと接続ガイド:

### インピーダンス:

スピーカー接続において最も基本的で重要なのは、位相を正相にする事です。これにより素晴らしい音を出力する事が可能になります。これはそんなに難しい事ではありません。負荷についていくつかの事と、最適な負荷でスピーカーを接続する事を理解すれば良いのです。

*MESA/Boogie* アンプは、4オームと8オームを扱う事が出来ます。真空管アンプは、4オーム未満でドライブする事はしないで下さい。;これを行うと、出力トランスを損傷する可能性があります。2オームを扱う事の出来る数少ないアンプ(例えばMESA(メサ)のBass 400+)であれば大丈夫です。反対に高い抵抗値(例えば16オーム等)の場合はアンプを傷める事はありません。

### ミス・マッチング:

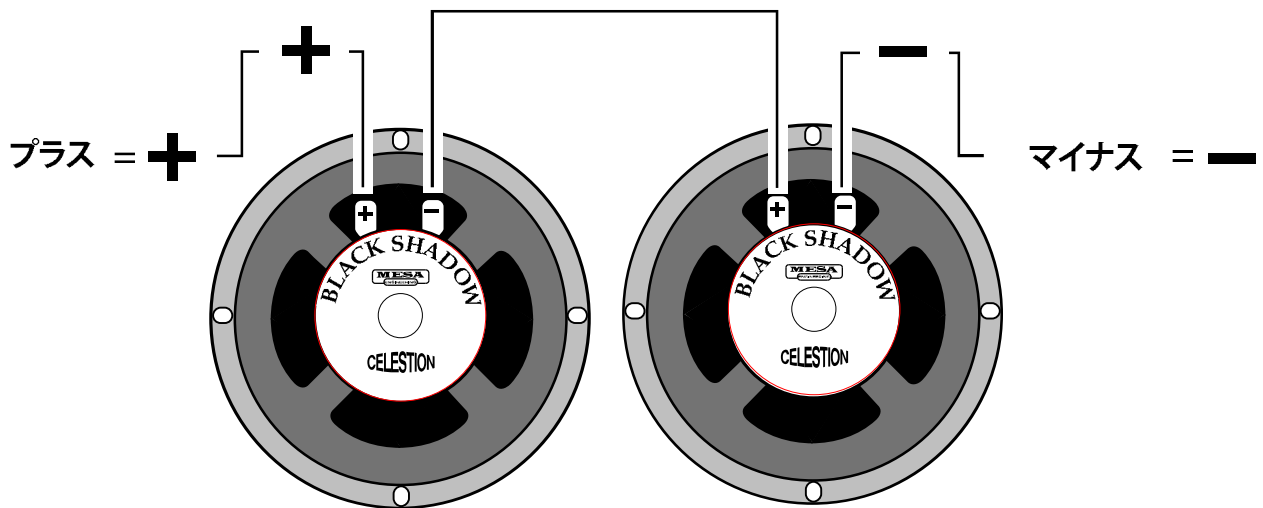
高い抵抗値(例えば8オーム出力を16オームのキャビネットに接続)でドライブすると、少しフィーリングが異なり、レスポンスが際立った感じになります。少しのミス・マッチであれば、トーンが若干暗く、出力とアタックが少し弱く、レスポンスが少し速くなる程度です。スピーカー・キャビネットが複数になると、ミスマッチは選択肢の1つになるほどです。

### キャビネット・インピーダンスの算出方法:

お持ちのスピーカーが1台の場合は、そのスピーカーのインピーダンスとアンプのインピーダンスを合わせて下さい。複数のスピーカーをお持ちの場合は、アンプにかかる負荷を計算しなければなりません。複数のスピーカーの接続方法は次の3種類になります。:

### シリーズ(直列):

スピーカーを直列に接続した場合、それぞれのスピーカーのインピーダンスを単純に加算します。例えば、8オームのスピーカーを2台直列に接続した場合は、16オームになります。



スピーカー A = 8Ω

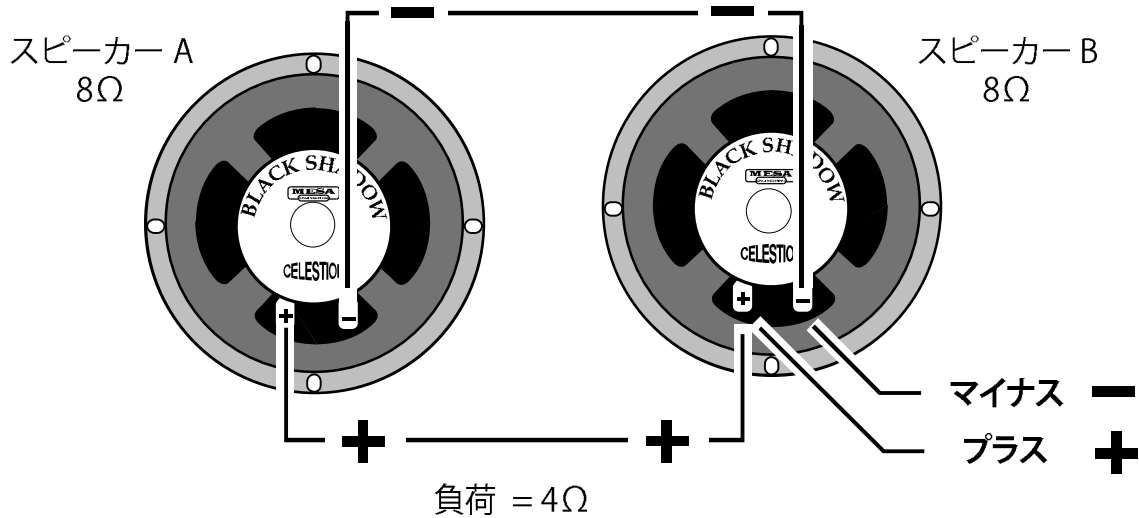
スピーカー B = 8Ω

**シリーズ(直列):**スピーカーAのマイナス端子と  
スピーカーBのプラス端子を接続

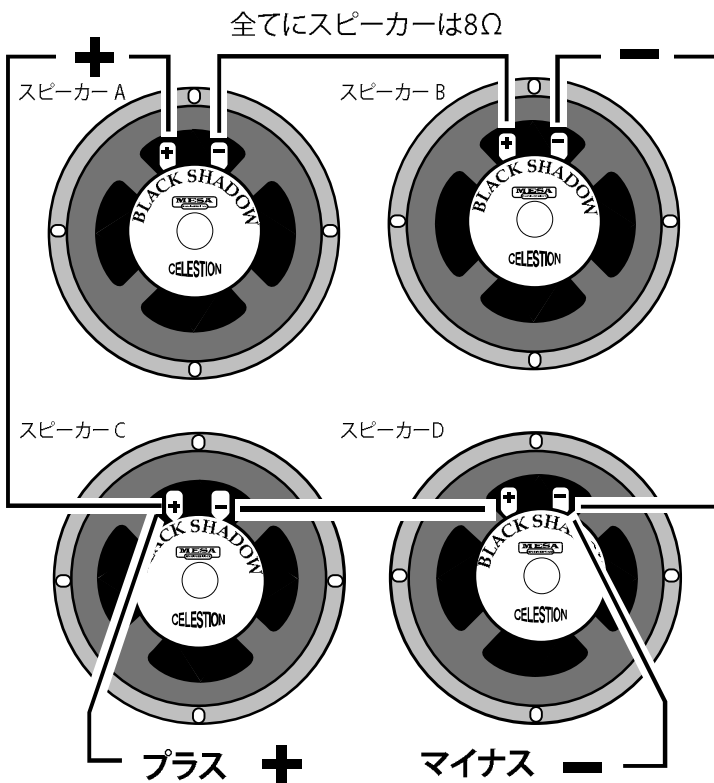
## スピーカー・インピーダンス・マッチングと接続ガイド(続き):

### パラレル(並列):

スピーカーを並列に接続した場合、スピーカーの抵抗値は下がります。2台の8オーム・スピーカーを並列に接続した場合、負荷は4オームになります。接続するスピーカーが全て同じ抵抗値であれば計算は簡単ですが、異なる抵抗値のスピーカー(例えば、8オームと4オーム、16オームと8オーム等)を並列に接続する場合は、少しややこしくなります。計算式は、それぞれの抵抗値をかけ算した数値を、それぞれの抵抗値を足し算した数値で割ります。例えば8オームと4オームであれば、 $8 \times 4 \div (8 + 4) = 2.6666$ オームになります。パラレル(並列):スピーカーAのプラス端子とスピーカーBのプラス端子、スピーカーAのマイナス端子とスピーカーBのマイナス端子をそれぞれ接続。



### シリーズ(直列)とパラレル(並列)の組み合わせ:



これは、2セットの直列接続したスピーカーを並列に接続する組み合わせです。ここで重要なのは、全てのスピーカーの合成抵抗値が低くなり過ぎてアンプに負担をかけない様にする事です。

スピーカーAのプラス端子とスピーカーCのプラス端子を接続。

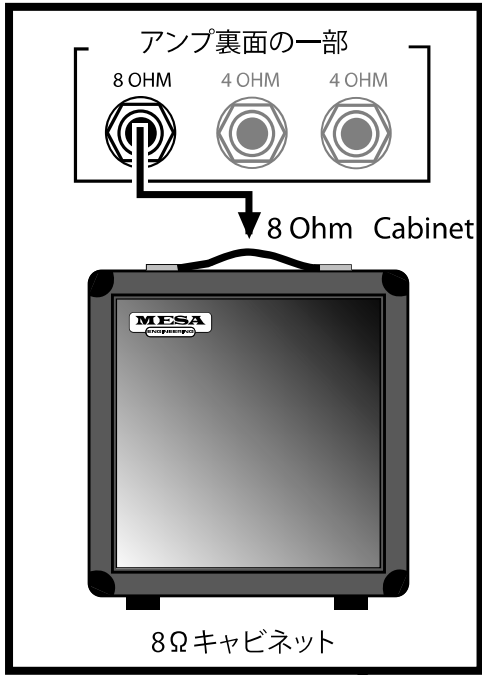
スピーカーAのマイナス端子とスピーカーBのプラス端子を接続。次にスピーカーCのマイナス端子とスピーカーDのプラス端子を接続。

そして最後にスピーカーBのマイナス端子とスピーカーDのマイナス端子を接続します。

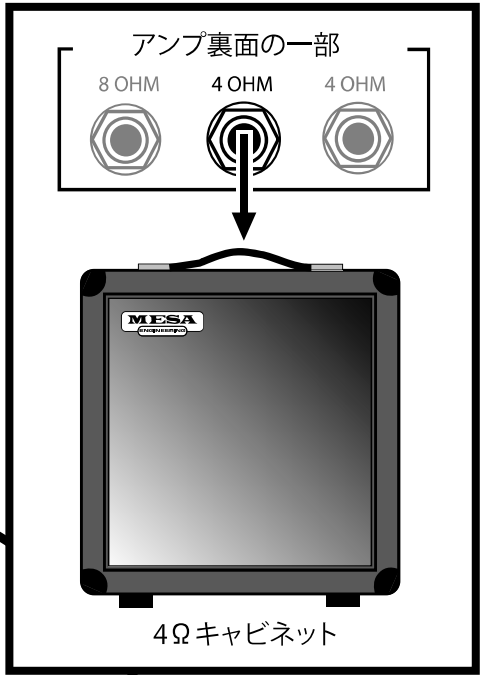
4台の8オーム・スピーカーをシリーズ・パラレル接続した時の合成抵抗値は、8オームになります。

接続方法 - アンプからスピーカーキャビネットへ

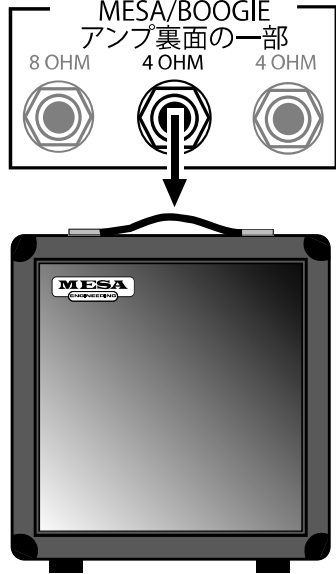
①



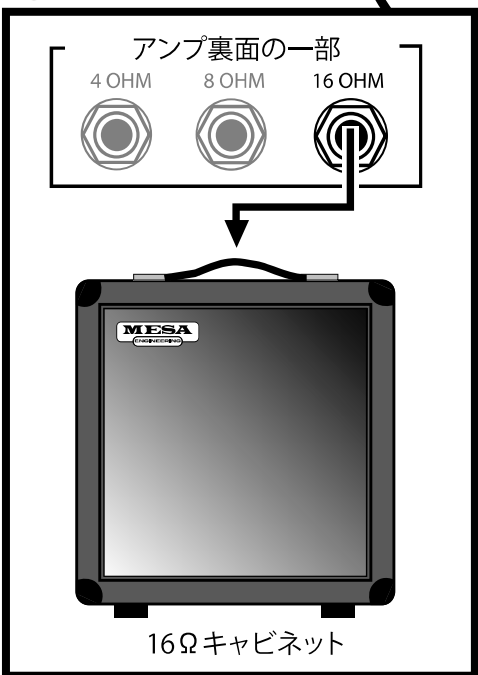
②



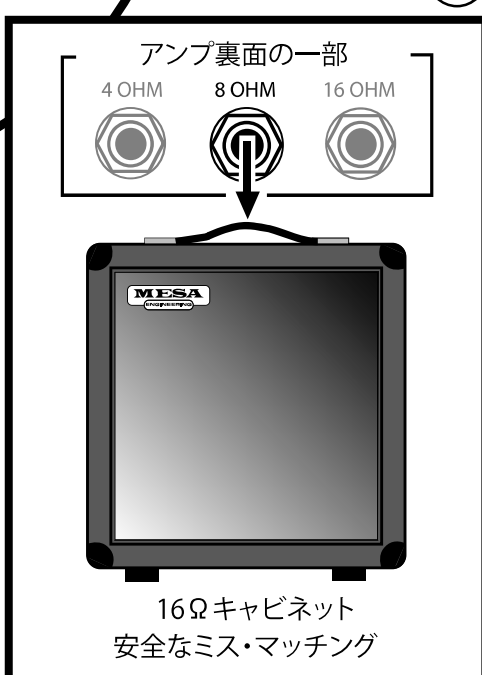
③



④



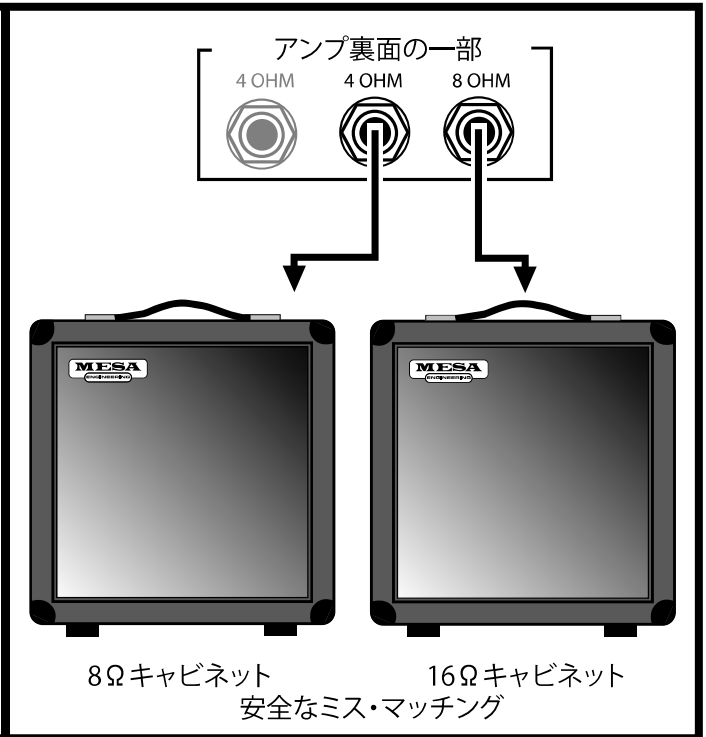
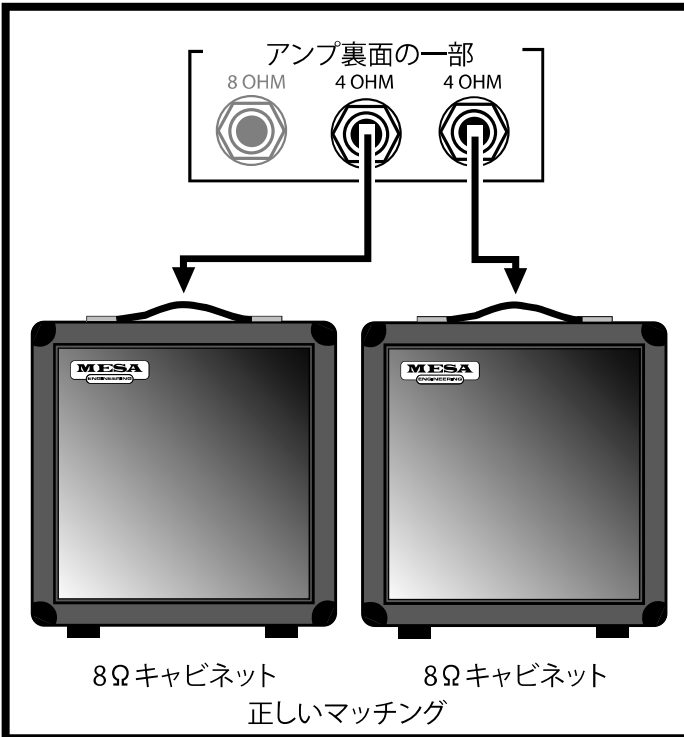
⑤



接続方法 - アンプからスピーカーキャビネットへ

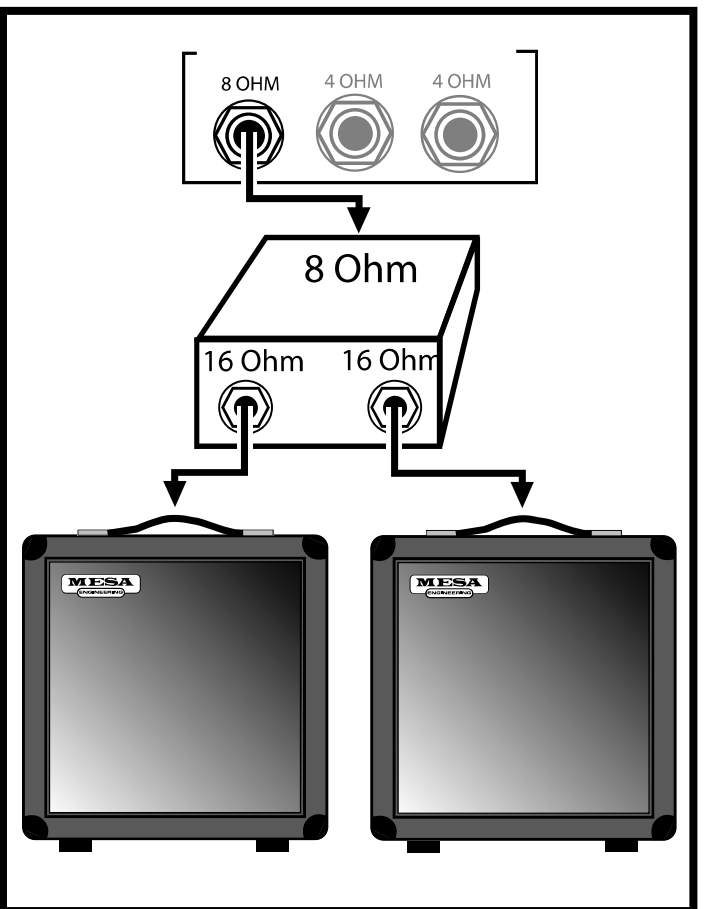
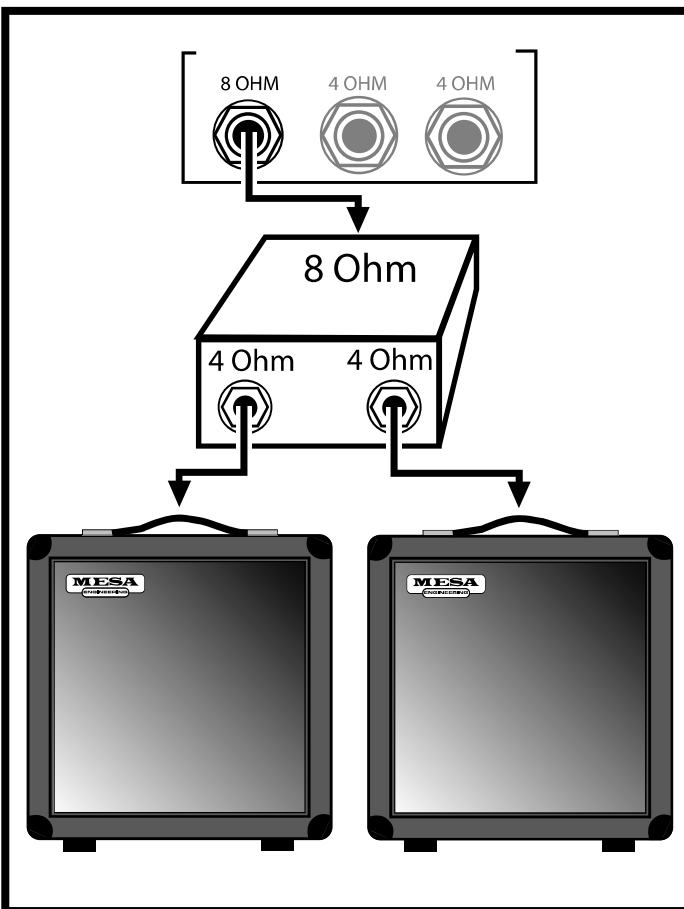
6

7



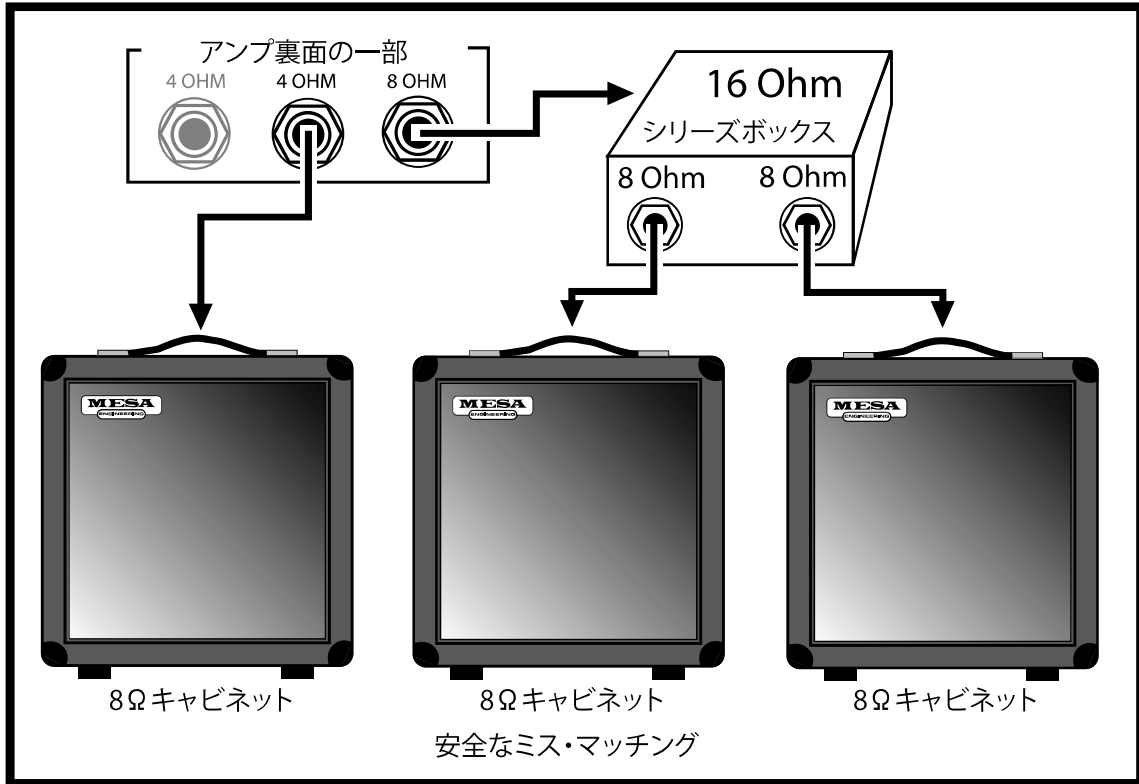
8

9

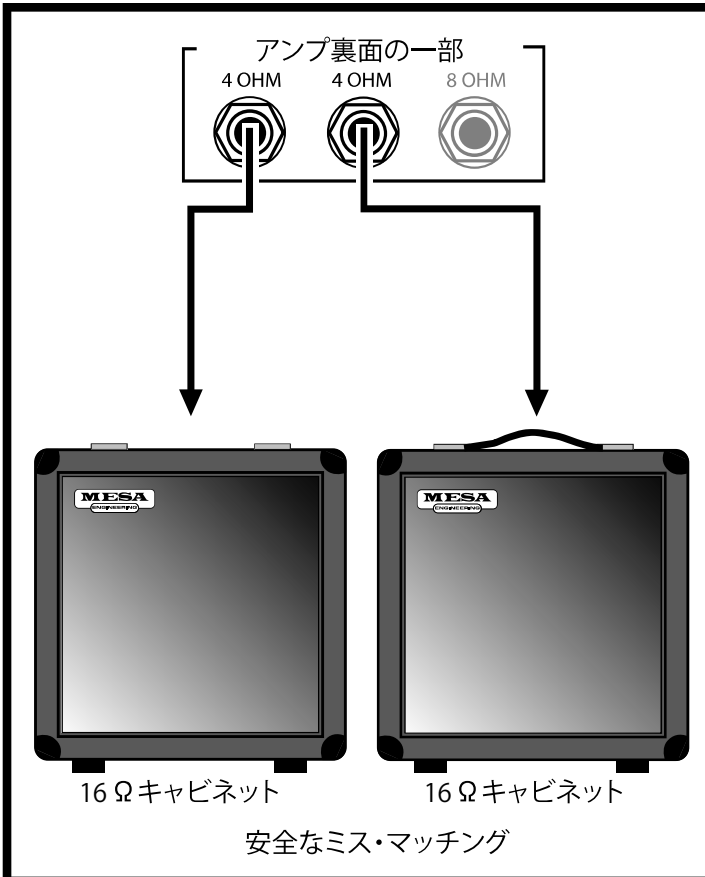


## 接続方法 - アンプからスピーカーキャビネットへ

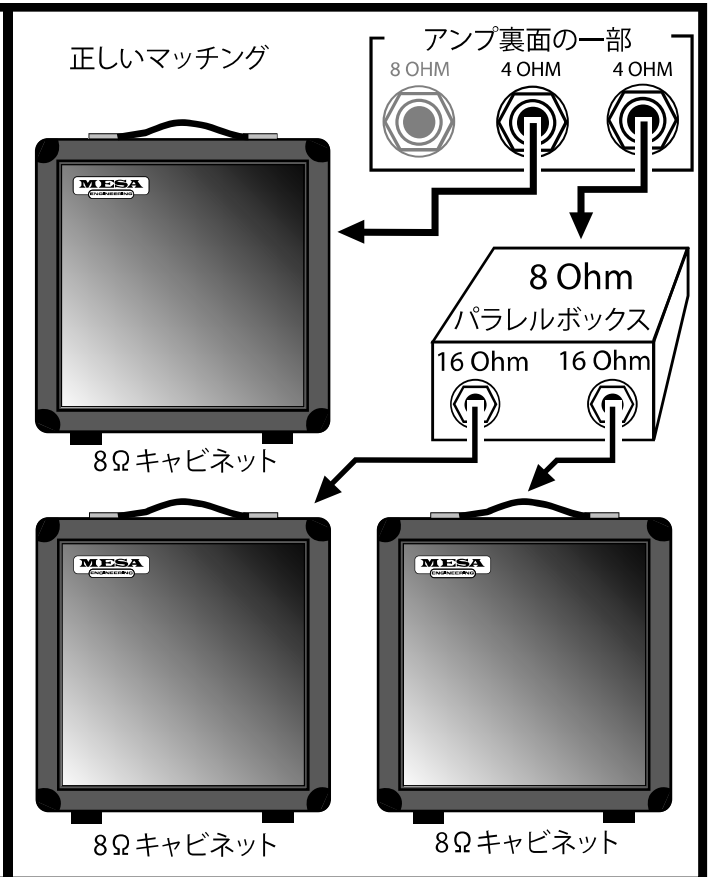
⑩



⑪

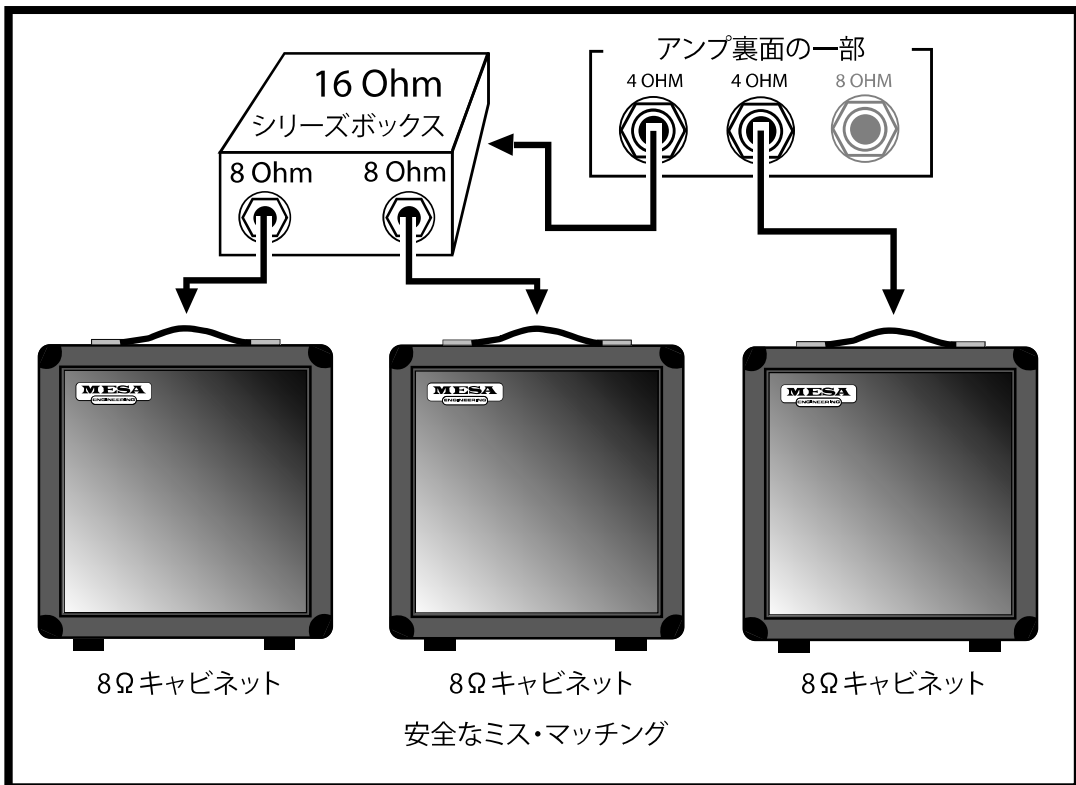


⑫

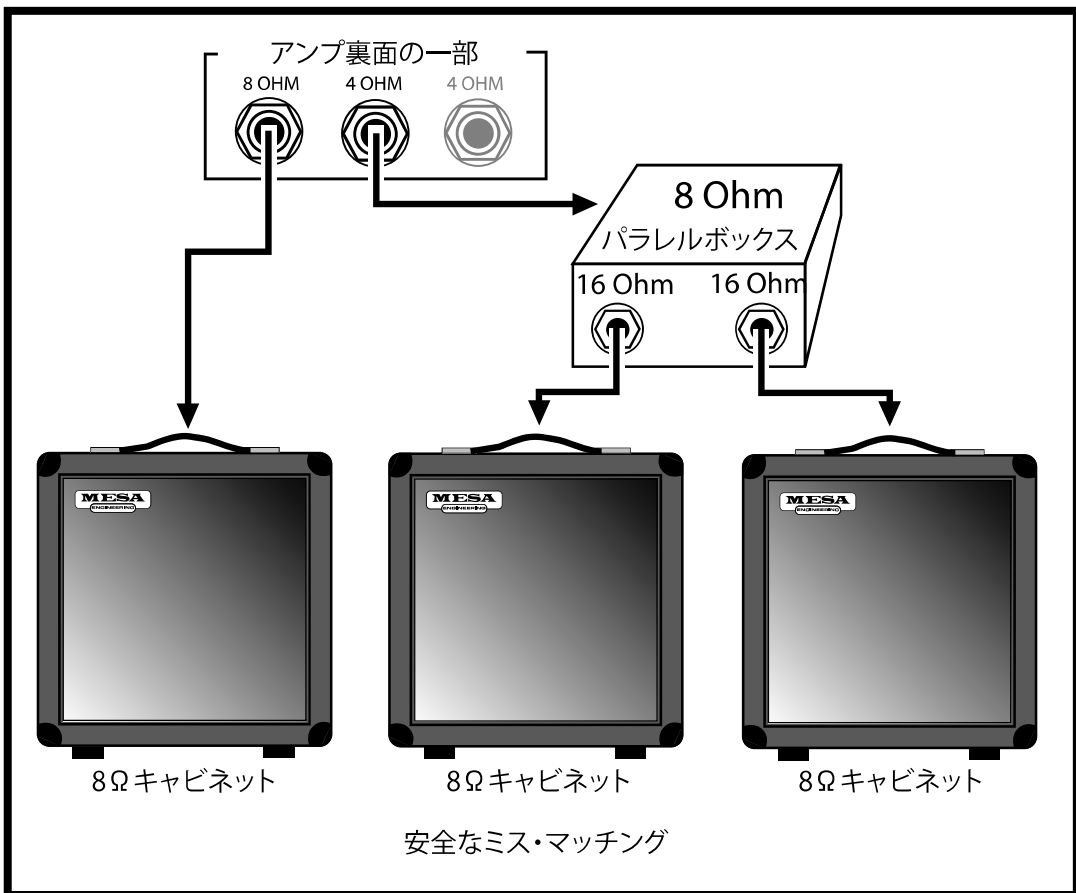


## 接続方法 - アンプからスピーカーキャビネットへ

13

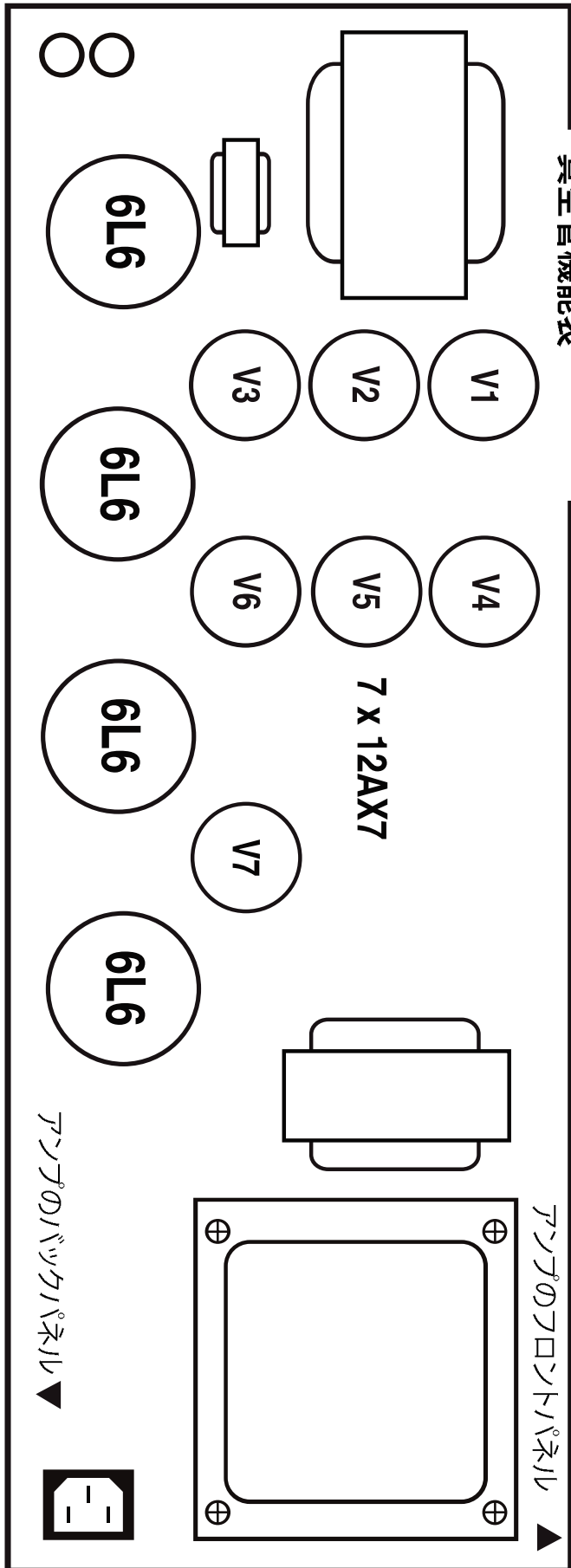


14



# Electra Dyne Head

真空管機能表



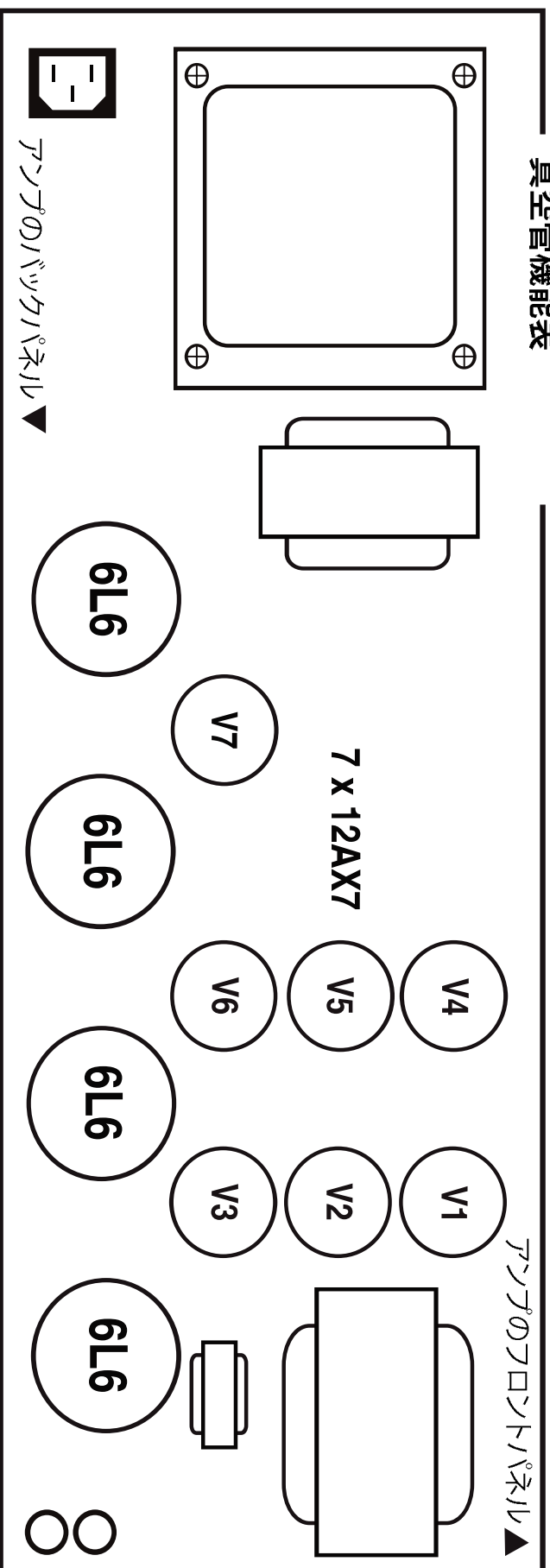
## Description of Tube Functions

- V1 =Vintage HI            V5A = Clean
- V2 =Vintage HI & LO   V5B = FX リターン
- V3 =Vintage HI & LO   V6 = リバート
- V4 = Clean                V7 = トラバ-



# Electra Dyne Combo

真空管機能表



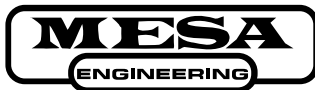
**Description of Tube Functions**

- V1 =Vintage HI      V5A = Clean
- V2 =Vintage HI & LO   V5B = FX リターン
- V3 =Vintage HI & LO   V6 = リバート
- V4 = Clean      V7 = トラハート





The Spirit of Art in Technology



**ギブソン・ブランズ・ジャパン株式会社**

Email: [service.japan@gibson.com](mailto:service.japan@gibson.com)

「@gibson.com」からのメールを受信できるよう設定をお願いいたします

お電話でのお問い合わせ窓口：0120-189433（通話料無料）

受付時間 9:30 - 17:00（土、日、祝日、年末年始を除く）